
さよなら

国府神紫音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら

【Nコード】

N4556F

【作者名】

国府神紫音

【あらすじ】

蘇芳上総の前から突如姿を消した親友の浅葱空良。彼の失踪から七ヶ月、蘇芳の前に一人の少女が現れる。「浅葱空良はどこ」平坦な声で問いかけてくる少女は、出会ったころの浅葱そっくりだった。少女が現れたのと前後し、蘇芳は誰かの視線を感じ始め……

序章

浅葱空良あやめくうらが俺の前から姿を消す前夜、俺は浅葱から呼び出されていた。月の綺麗な夜だったと思う。

「急にどうしたんだよ、浅葱」

「あ、ごめんね。寝てたかな」

浅葱は午後十一時過ぎにも関わらず、制服姿だった。塾に行っていない浅葱にしては珍しいと俺は思った。

「何かあったのか？」

「え？」

「いや、浅葱がこんな時間に外に出てるなんて珍しいからさ、驚いてんの」

「そ、そうかな」

俯いた浅葱が、何故か泣いているように見えたのは俺の気のせいだろうか。

「あ、あの蘇芳君」

「何？」

「急にこんなこと言うとビックリするかも知れないけど…」

「？」

俺が怪訝そうな顔で見ていると、浅葱が言った。俯けていた小さな顔をあげ、今にも壊れてしまいそうなガラス細工のような儚さを纏って、

「今までありがとう。蘇芳君に会えて、良かった」

「…浅葱？」

「この二年、すごく幸せだった」

何を言われているのか分からず、俺は立ち尽くす。

「……ほんとに、ありがとう」

微笑む瞳から、静かに透明な液体が零れ落ちる。月の下、浅葱の華

奢な体が映えていた。

「浅葱？何言つてんの？何かあったのか？」

浅葱は微笑むだけで、俺の問いに答えようとしない。浅葱を見つめていた俺だったが、今更ながらに奴の左腕に白い包帯が巻かれていることに気づいた。

「……っ」

俺の視線に気づいたらしく、浅葱が顔を強張らせて包帯の辺りを右手で隠すように掴む。痛みがあるのか、隠した刹那に眼が眇められる。

「怪我でもしてるのか？ちよっと、見せてみ」

近寄ろうとした俺だったが、――

「来ないでっ……！」

悲鳴じみた声音に、俺は反射的に足を止めていた。

「浅葱、一体どうしたんだ。腕だつて……。また吉川たちに苛められたのか？」

「違う……違うから来ないで」

俺は段々と苛々してきた。もとより短気な方だし、訳の分からないことはさつさとすつきりさせたいタイプである。

「家でだらけてた人間をこんな時間に呼び出した上に苛つかせやがつて、お前何様のつもりだよ」

「……」

「浅葱！」

「もう、会えなくなるから」

「は？」

「もう会えなくなるから、お別れを言いに来たの」
頭が混乱しかける。

「要約し過ぎだ。俺が納得出来るように言えよ」

「それは……」

浅葱が躊躇したのを俺は見逃さなかった。早足で浅葱の前に立つと、顔をはね上げた奴の左腕を取った。夜道なので分かりにくいだが、何

か染みのようなものが広がっていた。傷口から出血しているのだ、と悟る。

「いつ、痛いっ」

「一体どうしたんだよ、この怪我は！夕方まではこんなになってなかったじゃねえか！！」

その時、背中になにか尖ったものを押し付けられた。前に立つ浅葱の眼が愕然と見開かれる。俺の後ろにいるのは、どうやら男らしい。低い声が浅葱に向かって放たれる。

「さあ、浅葱。大事な親友を殺されたくなければ、大人しく私に聞いておいで」

声が震えている。俺は何が起こっているのか把握出来ず、馬鹿みたく突っ立っていた。頭の何処かで、押し付けられているのはナイフだ、とか後ろにいる男と浅葱は知り合いなんだな、とか考えていた。

「……蘇芳君を放して」

「放して欲しいなら私と来いと言っているだろう」

浅葱が俯く。噛み締めらる唇から、意味のない呻き声が漏れ聞こえてきた。

「さあ、浅葱」

「……ほんとは、人畜無害なままで別れの挨拶したかったのに」

呟かれた言葉はか細く掠れていて。

「蘇芳君を傷付けるのは許さない」

浅葱が怪我をしている左腕を俺！というより俺の背後にいる男に向けて突き出す。俺の背中に付けられていたナイフの先端が小刻みに震えていて、気が気ではなかった。そしてそれ以上に…、

「止めなさい、それ以上は、」

「蘇芳君、僕は」

言葉の続きは、浅葱から発されることはなかった。今にも泣き出しそうな顔で微笑み、何かを呟いただけ。何か言わなければ、と何かを俺をせつつくが俺は馬鹿みたく突っ立ったままだ。

「止める！」

背後の男が狂ったような咆哮を上げ、鼓膜が痺れた。男が俺の横を通り抜け、左腕を突き出したままの浅葱に突進して行く。浅葱が俺を見る。俺は呆然と見返すだけ。

「さよなら」

浅葱の口がそう象ったように見えた。「浅葱、」

ようやく言えたのはそれだけ。

次の瞬間、目の前で七色の光がはぜるのを見た。どおおおんっ！！と轟音が住宅街の夜気を震わせる。

「さよなら」

耳元で悲しげな浅葱のものらしい声を聞いた瞬間、俺は無様にも意識を失ったのだった。

そしてその夜以来、俺は浅葱空良を見ていない。

第一話：日常

二月も半ばに入り、俺の住む築瀬町^{やなせちよう}は雪を見ない日はないことが続いていた。

「上総、さつさと片しちやってよ！片付かんから」

俺はお袋にケツを叩かれるように急かされ、機械的に朝食を口に運んでは、機械的に咀嚼していた。

時刻は六時五十分。

親父は車で一時間以上かかる職場に通勤しているし、大学生である姉貴は電車で一時間半もかかる国立大の学生である上にサークルの朝練が毎朝のようにあるので、どうしても蘇芳家の朝は必然的に早くなる。徒歩十五分の私立高校に通う俺としては良い迷惑だ。面倒くさがりのお袋は、朝食をいっぺんに作るので冷えたもの、もしくは温め直したものが嫌なら早く起きるしかない。

「上総、今日は部活？」

洗い物をしながら、お袋が訊いて来る。俺は寝ぼけ眼でお袋を見返し、

「今日は部活なし。すぐ帰る」

と答える。

「母さん塾があるから、家のことよろしくね。前に作ったカレーを解凍して、あとご飯三合炊いておいて」

「ん」

お袋はお袋の昔馴染みが開いている私塾で添削の手伝いをしている。そっぴや、今日は金曜日だっけか。金曜日、と自分で認識しておきながら忘れようとしている記憶をまざまざと思い出して小さく舌打ちする。あれから七ヶ月、と思わず考えてしまう。

「御馳走様」

食べ終わった朝食の皿をお袋に渡し、俺は洗面所へ赴く。スリッパを履いていない足裏から、フローリングの冷たさが伝わって来る。

冷え症な姉貴は夏でも靴下を履いてスリッパも履くが、家で一番寒さに耐性のある俺は年から年中裸足だ。裸足のほうが気持ち良いと思うし。

「今日もいいかんじに冷たいな」

相変わらず自分でも理解できないことを呟きながら、俺は蛇口から流れる水で目覚ましの意味も込めて顔を洗った。

俺は必ず六回きっかり洗う。

特に六という数字にこだわりがあるとか理由があるとかいうわけではない。ただ何となく、という理由で中学生の頃から続けている俺の数少ない取り決めだ。洗顔の後は歯磨きだ。辛いと評判の歯みがき粉であまり時間はかけずに、だが歯医者に教えられた通りのやり方で磨く。ちなみに虫歯は小学生で治療して以来一切出来ていない。これは少し自慢だったりする。些細な。

「……」

口をゆすいだ後は、自室に戻って少しだらける。

徒歩十五分だから、ホームルーム開始の二、三分前に着けばいいので通常なら八時十五分くらいに出ても悠々間に合うからだ。雪が降っていることを考慮すれば、八時過ぎに出たほうが良いかも知れない。俺はベッドに寝たりはせず、凭れてラジカセの電源を入れた。ダチの三田村お勧めのCDが入ってるから、それを再生させる。雪の降る静かな朝にはあまり似つかわしくないロックが部屋に響く。

なくしたくないものがあつた。それはとても大切に、でも粉々に壊れた。硝子細工みたいに

（硝子細工、か）

七ヶ月前の“あの時”もそんなことを思った。あいつの笑顔は、硝子細工みたく透明で今にも壊れそうだった。

（ダメだ、やっぱり思い出しちまう……くそっ）

俺は心中で呻き、いつもと変わらない天井を見上げた。意味はないけど。

「ん、」

枕元の携帯が着信を告げる。三田村からのメールだ。

『蘇芳へ。今日風邪引いたから学校休むわ。CDはまた今度返してじゃ』

絵文字は全くなく、用件だけが短く綴られている。三田村、風邪ひいたのか。三田村は風邪を引きやすいと思う。多いときは夏でも月に三回は風邪で休んだことがあった。俺は風邪を引いた記憶が最近はない。些細な自慢その二、だ。…どうでもいいか。俺は膿んだため息を吐き出し、眼を閉じた。暖房を入れていない室内はひんやりとしていたが、この冷たさが俺は好きだ。空気を鼻から吸い込む。

（蘇芳君は寒いのが平気なんだね。羨ましいなあ）

……今日の俺はどうかしまったのか。あいつのことばかり思い出す。思い出したくないのに。脳裏に甦る、七色の閃光と、大地を揺るがすような轟音。その中で俺は意識を失った。奴のー浅葱空良の「さよなら」という言葉を遠くに聞きながら。それから浅葱がどうなったかは知らない。俺はその日から三日間はずっと目覚めなかったらしい（お袋談）。だが回復した後であの時あったことをお袋やご近所さんに訊いて回っても、七色の閃光を見た、だとか、すごい音がしたって言う人間が一人もいなかった。ただ俺が道路のど真ん中にぶっ倒れていた、という証言しか得られなかった。

「一体何だったんだろうなあ」

返事がないのは分かりきっていたが、それでも声に出さずにはいられなかった。

俺は考え事をして時を潰し、七時四十五分くらいから支度を始めた。お袋がアイロンをかけてくれた白のカッターシャツに袖を通し、濃紺のスラックスを履く。シャツの上から肌色に近い色のニットベストを着、仕上げにブレザーを羽織って完成。

「まだ八時前だけど、行くか」

鞆に携帯を突っ込み、部屋をでる。

「じゃあお袋、行つてきます」

お袋は今から洗濯を始めるらしかった。

「ん。雪降ってるから、転ぶんじゃないよ」

「ああ」

お袋にヒラヒラと手を振り、俺は淡雪の舞う外に一步を踏み出した。

第二話：止まない雪の中の転校生

淡雪が舞う。

「行つてらっしゃい、上総君」

「うん、行つて来ます」

「おはよう、上総ちゃん」

「上総、気を付けて歩きなよ」

「分かつてるよ」

方々からかけられる声に、俺は返事を返す。ご近所さん受けは何故か良くて、良好な関係を築けている。

「上総さん、おはよう」

「あれ、珍しいな。こんな時間に会うなんて」

俺より一つ下で同じ高校に通う五条真由理とばったり出会った。小柄ながら体力とスポーツの才には眼を見張るものがあり、幾つかの運動部を掛け持ちし、所属していない部活からでもヘルプの要請があれば飛んでいく、という豪傑少女なのである。

「今日は寝坊しちゃいました」

この時間に登校して寝坊になるのか、と俺は苦笑する。

「雪、止まないですね」

「真由理ちゃんは、雪は嫌い？」

真由理ちゃんは、何の手も加えていない眉を下げ、

「嫌いではないですが、不便ではありますね」

ごもつとも。俺は軽く肩を竦める。

「上総さんは好きですか？」

「俺？俺はそうだな、まあ嫌いではないな」

「また出た。上総さんの誤魔化し」

「何だよ、それは」

真由理ちゃんはたまによく分からないことを言う、と俺は思う。

「上総さんて、下級生に人気があるんですよ。知ってました？」

かなりの初耳だ。俺はきょとん、と横を歩く少女を見下ろす。真由理ちゃんも鈍感、と呆れたかのようなため息をついたあと訥々と話してくれた。

「あるんです。私の友人でかなり物好きな女の子がいるんですけど、一二年生の女の子から見た上総さんの印象をランキングしたんだそうです」

「そりゃあ物好きな。一体何が楽しいんだ？」

「私に言われても困りますけど……。第一位は、何と“ミステリアスなところ”だそうですよ」

俺ははあ？と変な声を上げていた。ミステリアス？この俺が？

「つまりは何考えてるか分からないってことか？」

「……そうかも知れませんね」

否定しろよ、と突っ込もうとしたところで俺は違和感を感じた。誰かに見られているような気がしたのだ。立ち止まって、背後を見るが俺に注目しているような人間はいない。人があまり居ないし、俺を気にする余裕もないだろう。

「上総さん？」

真由理ちゃんの怪訝そうな声が聞こえる。俺はハッと我に返る。

「顔色悪いですよ？どうかしました？」

「何でもない。行こう」

「？」

不思議そうな顔をしたものの、素直に従ってくれる。触れてはいけない、とでも思ったのか。俺は真由理ちゃんとの会話に集中し、視線のことを意識の外に追い遣る。雪はまだ止みそうにない。

教室に入ったのは、八時十三分くらいだった。真由理ちゃんと会話しながらゆっくり歩いたからな、と思う。

「蘇芳、おはようさん」

「ちす、川下」

川下春樹は、風邪を引いて欠席するであろう三田村の幼馴染みであり、俺が三田村と仲良くなる際にこちらとも仲良くなったわけだ。銀縁眼鏡と真面目そうな外見だが、授業をよくサボっていたりする俺はサボらないけどさ。

「聞いたか？今日転校生が来るらしいぜ」

嬉しそうなのはそのせいか、と俺はため息をはく。川下は女好きだ。「しかもちよつとわけありでさ、両親と離れて婆さんの家に居候してるらしい」

どこでそんな情報を仕入れて来るのかと、俺は呆れる。情報収集力をもっと別の局面で使えよな。言っただけ聞かないだろうから言わないけどさ。

「何だよ、変な顔して」

「もともとこんな顔だ。悪かったな」

「またそんな憎まれ口叩く。…そういうええ雪、なかなか止まないな」雪は積もる性質の雪ではないため、窪みのあるところに溜まるくらいで大した邪魔にはなっていないが、今降っている雪は三日前の昼から降り続けているものだ。北国ではどうか知らないが、築瀬町では滅多にない。

「俺、生まれた時から築瀬だけど三日雪が降り続いたことないぜ」

「…ふうん」

三田村にも今度訊いてみようか、と思ったとき担任が入って来た。岩佐という、四十代の中堅女教師。お洒落とは無縁、と本人が自分で言っていた通りダサイ格好がお気に入りだった。

「ちよつと早いけど、大事なお知らせがあるからね。ー入って」

岩佐の号令に、着席した生徒たちはみな彼女の視線の先を凝視した。俺一人、窓の外を見ている。窓際は現実逃避出来て良い、と心ここにあらず状態でいると、川下につつかれた。

「何だよ、」

「こつち来る、」

「は？」

川下が何を言いたいか理解する前に、俺の横に一人の女子が寄って来た。見上げた俺は、眼を見張る。雪のように白く、小さな顔。長い睫。今時珍しく二つ結びにされた髪は真っ黒で、肌との対比が綺麗だ。そして何より俺が驚いた理由は…、

「あ…さぎ？」

顔が似ている、というんじゃない。なんというか、雰囲気、とでも言うのか。力のない、虚ろな瞳。それでいて対象の何をかも看透かしてしまいそうな瞳。それが、出会った頃の奴にそっくりなのだ。だから思わず奴の名を呟いていた。すると、その女子は俺を見下ろし色素の薄い唇を開きこう訊いてきた。

「浅葱空良はどこ」と。

第三話：過去とこれから

「なあ、お前ってあの子と知り合いだったのか？」

「だからあんなやつ知らないって。川下、お前しつこい」

「川下、蘇芳静かに。授業中だ」

数学教師の山王丸（仰々しい名字だが、山王丸自身はひよろい体格で威厳はほとんどない）に注意される。怖くも何ともないが、注意されて喜ぶような性癖は俺にはない。

「川下黙ってる」

「へいへい」

真面目に授業を聴く気が初めからない川下は、つまらなそうに唇をへのじにしてノートに落書きを始めた。これで学年三位を常にキープしているのだから、人生とは実に不思議なものだと俺は思う。それにしても、何なんだあの女は。感情のこもらない眼で俺を見下ろし、淡々とした口調で訊いてきた。その内容に、俺はひどく動揺した。

『浅葱空良はどこ』

そんなの俺が知りたいと思う反面、こいつは浅葱について何か知っているんじゃないかと勘繰った。浅葱が失踪した理由や、七色の閃光のこととか。だがこちらが質問する余裕はなかった。岩佐が慌てたように転校生を席に座らせ、ホームルームを始めてしまったからだ。今日は連絡事項が多く、ホームルーム終了後すぐ一時間目ーつまり今行われている数学ーが始まってしまったからだ。

「で、ここで加法定理を使うから」

全く授業に集中出来ない。俺はため息をついて、シャーペンを置いた。細やかな授業放置だ。

浅葱と出会った頃の眼が、あの転校生とかぶって仕方ない。

『どうして助けた』

感情のこもらない浅葱の声が甦り、俺の意識は二年前の夏に飛んだ。

二年前の夏、俺はごく普通の中学三年生として毎日を過ごしていた。高校入試に向けてばちばち準備を始めていた頃だったと思う。

そんな中俺のクラスに転校してきたのが浅葱空良だった。

一目見たときから、不気味なやつと俺は思っていた。

体は細く、顔も中性的で可愛いらしい外見をしていた。

―だが一切笑わない青白い顔と、力のない虚ろな瞳が不気味でしうがない。男子は不気味がり、女子の中には話しかける者もいたが、浅葱は何の反応も返さなかった。こりゃ、いつか苛められると俺は思っていたが、本当にそうだった。しかも俺はその場面に出くわしてしまったのである。確か夏休みまであと一週間をきったあたりの放課後だったと思う。

「お前、気持ち悪いんだよ」

「変な眼で見やがって」

先生たちも手を焼いている二年生の不良三人に浅葱は囲まれていたが、ピクリとも表情を変えない。

俺はおっ、と思う。

実は喧嘩とか強いのかも、と思いそれなら助けるのは失礼かな、とあの頃から変わっていない変な思考で俺は見守っていたのだが、やはりというか、なんというか浅葱は弱かった。あっという間に羽交い締めになれ、二人に殴られるままだ。しかしそれでも浅葱の虚ろな眼は変化することなく、不良たちを見ているだけだった。いや、彼らを見てすらいなかったかも知れない。

「気持ちわりいな」

俺も気持ち悪くて、なかなか助けに行けなかった。不良よりも、浅葱のほうに恐怖を感じていたからだ。だが不良の一人が浅葱のベルトに手をかけ、今まで眉一つ動かさないでいた浅葱の眼に微かに怯えが走ったように見えた瞬間、俺は飛び出していた。

「お前ら、何してんだ！」

「あ？」

不良全員の眼が俺に向くが、怖くともなんともなかった。

「あんた、三年の…。何か用っすか？」

「止めるよ。怯えてるだろ」

俺の言葉に、三人が笑う。

「センパイ、冗談キツいっすね。こいつが怯えてる？こんな能面みたいな表情して？」

一人が浅葱のズボンを脱がそうとしたので、俺はそいつの手を掴んだ。不良三人が剣呑な目付きで俺を睨む。

「あんたウザいよ」

「奇遇だな。俺もお前らがウザいと思った」

「！」

ひゅっ、と振られた腕を難なく避けて俺は逆にその腕を掴んで捻り上げた。

「いつ、いでででで！」

「てめえ！」

他の二人が襲いかかるが、俺は腕を掴んだままにそいつらの腹に蹴りを叩き込んだ。不自由な姿勢で放った蹴りは、しかし十分にクリンヒットだったらしい。呻き、一人が吐瀉物を撒き散らす。

「大人しく退散しろよ。腕、折るよ」

「や、やめろっ！」

「せえの、」

本気で折ろうと思った訳ではないが、牽制の意味を込めるためにもう少し力を加える。

「野郎！」

俺の蹴りから立ち直った一人が拳を振り上げるが、

「……」

ずっとだんまりを決め込んでいた浅葱が俺とその拳の間に体を割り込ませた。啞然とする俺の前で、浅葱の頬に一発入る。がつん、と物騒な音がして、浅葱は尻餅をついた。

「ば、馬鹿！何やってんだよ！」

俺は慌てた。助けに入ったのに、これでは本末転倒だ。

「…気に入らないのは、僕でしょう」

俺は眼を見張った。あの浅葱が、転校初日の自己紹介から何も話さなかった浅葱が今喋った。意味のある言葉を、喋った。

「だから、あなたが殴られる必要はない」

全く抑揚のない口調で言われても戸惑うばかりだ。思わず不良の腕を掴む手から力が抜けるが、不良もぼかんと浅葱を見ており逃げる気配がない。今喋った、と驚いた顔が物語っている。浅葱は続ける。

「だから、僕を抱きたいなら抱けばいい」

「！？」

浅葱がシャツの釦を外そうとしたので、俺はまた馬鹿！と罵って止めさせる。浅葱がぼんやりした眼で見上げ、不思議そうに微かに眉を寄せた。

「あ、頭おかしいんじゃないの。こいつ、」

抱きたいなら抱けばいい、と言われた不良たちは不気味そうに浅葱を見て

「い、行こうぜ。気持ち悪い」

そそくさと退散して行く。俺は奴等を見送る、ということはせず浅葱に怒鳴る。

「何考えてるんだ、お前！！何言ってるか分かってんのか！？」

「……」

浅葱は答えない。まただんまりかよ、と俺が内心で嘆いた時、

「どうして助けた」

と平坦に言われた。問いではなく、確認しているような口調。

「どうして助けた」

「え、えつと」

「……僕に恩を売ってたのか？」

「！」

カツとなつて、思わず浅葱に手を出しそうになった。だが寸前で踏み止まり、代わりに浅葱の無表情を睨み付ける。浅葱はじつ、と俺を見返す。その眼の奥に微かに不安そうな色があることに俺は気付いた。何で気付けたのかは未だに不明だが、ただの偶然だったのかも知れない。

「そうだよ」

「……」

浮かぶ哀しみの色。

「……っていうのは嘘」

「……」

「助けたかったから助けた……っていうのじゃ駄目な訳？」

「……」

今度は驚きか。

「何か喋れよ。ロボットと話してるような気分になるだろ」

「……」

「ああもう良い。俺は帰る」

鞆を拾い、何となく浅葱の黒髪を撫でて立ち去ろうとした。だがシヤツの裾を掴まれ、足を止める羽目になる。

「浅葱？」

「……からないんです」

「あ？」

「打算も何もなしに助けてもらえたことないから、だから助けたいから助けたって言われたら、どう反応したら良いか分からないんです」

浅葱が長文を喋ったことと、話の内容に俺は驚く。

「どう反応したら良いんですか」

全くの無表情で訊かれる。俺はそれでも浅葱が必死なのが分かった。こいつはただ不器用なだけかもしれないと思う。不器用過ぎる気がするが。

「…んなの、ありがとって言えば良いんじゃないの？や、別に感謝されたいから助けるつつう訳じゃないんだけど…」

自分で言っておいて、俺は慌てた。もつとうまく言えたら良いのに。「…つまり、あなたは打算的に僕を助けたのではないってことですか？」

打算的って…と俺は呻く。何か同い年と話してるような気がしない。

「まあ、な。助けたいから助けたっただけ。お前、怯えてたし」

…というよりそう見えた、という俺の主観なわけではあるが。

「怯えてた？僕が？」

「そう見えたつつうこと。何だ、プライドが傷付いたのか？」

「そついう…訳じゃないですけど」

何か深い事情がありそうだな、と俺は心中で嘆息する。同時に長い付き合いになりそうだと言う予感もあった。

「怯えてた、僕が」

自省を始めたらしく、浅葱は何やらぶつぶつ呟き始めた。俺の声に反応しないので、肩透かしを食らった気分を味わいつつその場を後にした。

今思えばよく二年間も親しく付き合ったな、と思う。そして出会ったころには考えられないほどに、浅葱は感情を表すようになった。笑い、泣き、怒り。

『この二年間、本当に幸せだった』

七ヶ月前の、あの時の言葉。今も頭から離れない。不器用な親友は元気にいるだろうか。今何処でどうしているのだろうか。もう会うことはないのだろうか。

「……？」

不意に視線を感じた。誰かに見られている。俺は周囲を見て、視線の主を悟る。二年前の浅葱と同じように感情のない眼で俺を観察しているのは、転校生の女だったのだ。確か此の村紫このむらゆかりという名前。俺は睨み付けたが、全く効果はなく此の村の視線は俺から一ミリもぶれない。

「……っ」

そのうち、見られていることに苛立ちと不安を感じて来た。

思わず怒鳴りつけようとした瞬間、授業終了を告げるチャイムの音が鳴り響き俺の衝動を霧消させた。同時に此の村の視線も俺から外れる。俺は悟る。あの女は浅葱を探している。探っている。それなら都合が良い。あいつが知っている浅葱のことを何としても聞き出してやる。俺はそう決意を固め、密かに拳を握り締めた。

この時はまだ知らなかった。この時の俺のこの決意が、浅葱をひどく苦しめることになることを。

第四話：敵対宣言

昼休憩、俺は川下につかまる前に教室を出た。思った通り、此の村紫が静かについてくる。

誘い出されたことに気付いているのかいないのか。

恐らく気付いているのだろぅと思った。

生徒が思い思いに散らばっている騒がしい廊下を歩き、二階に降りる。

二階から特別棟への渡り廊下を通り、特別棟へ。此の村はついてくる。俺は図書室横にある保管室―持ち出し禁止で重厚な書籍が保管されている部屋に入った。滅多に人の入らない、通常教室三分の一ほどの大きさの部屋には高い本棚があり埃っぽかった。浅葱が好きな場所だったなと思い、背後に向かって言った。

「ここ、浅葱が好きだった場所だよ。感想は？」

此の村紫は感情ののらない声で答える。

「私には好きになれそうにないな」

「じゃあ俺たち、仲良くなれそうにないな」

「……最初から馴れ合う気はない」

低い声だな、と思う。そして抑揚が一切ない。俺は此の村を睨み付ける。

「お前、浅葱のこと知ってるのか」

「だとしたら？」

「……あいつのことを話せ。お前は俺に浅葱は何処か訊いてきたけど、俺の方が知りたいんだ」

此の村の表情は変わらない。じつ、と俺を観察している。

「此の村」

「そんなに訊きたいか」

「あ？」

「そんなにあの男のことを訊きたいのか」

もしかして素直に教えてくれるのだろうか。意外な事態に俺は、眼を見開く。

「お、教えてくれるのか？」

「訊きたいのか」

「き、訊きたい……」

俺が頷いた瞬間、此の村が初めて笑った。だが明るい笑い方ではなく、にいつと唇の端だけをあげるといふ不器用なものだった。背中に寒気が走る。

「お前がそんなに一生懸命だったら、浅葱空良は泣いて喜ぶだろうな……人間のようにな」

人間のようにな、という言葉に俺は眉をしかめる。まるで浅葱が人間ではないみたいない言いか、と思ったのだ。

「お前のせいだぞ」

「……！？」

指で指され、加えて非難された。性でムツとする。

「……何がだよ」

「自覚なし、か」

「あ！？」

「お前があいつに感情を与えたせいで、私が出張る羽目になった。組織も人員不足で良い迷惑だ」

何を言われているのやらさっぱりだ。

「意味分かんねえんだけど」

「私たちにとって感情などただの足枷にしかない。だがお前が浅葱空良に感情を与えたせいで、あいつは使い物にならなかった」

「……使い物って、」

物に対するような言い方に、俺は更に腹がたった。

「あいつは物じゃないんだぞ。それに、お前は浅葱とどういう関係なんだ。浅葱は今何処にいるんだ！」

訊いている内に苛立って来た俺は、思わず此の村の肩を掴もうとした。だが伸ばした手をガツ、と片手で難なく掴まれる。え、と思ったときには腕を捻られ俺は痛みに呻いていた。

「いつ、つう！」

「私に触れるな、ゲスが」

此の村が平坦な口調で告げる。ぎしつ、と不穏な音が腕から響き、余りの激痛に涙すら出てきた。

「はな…せよっ」

「ふん」

離せと言ったのは俺なのだが、いきなり離されたせいでバランスを崩す。思わず膝をついた俺を、此の村が上から見下ろして来る。軽蔑しているのかと思いきや、やはり感情ののらない瞳でしかなかった。

「…私の質問をもう忘れたのか。『浅葱空良は何処』と訊いたんだぞ。そんな私がいっつの居場所を知っていると思うのか」

「っ、でも浅葱とは知り合いなんだろう」

「一応な。だが、今あいつにとって私は一番の脅威だろうな」

意味深な言葉に、俺は更に理解不能状態になってきた。頭がパンクしそうだ。

「どういう意味だ」

「さて、ね…。そこまであんたに教える義理はないだろう」

今さら黙秘か。意味が分からない。俺は此の村を睨み付けるが、腕の痛みが収まらない今、此の村に突っ掛かる気にはなれない。だがこいつが浅葱のことについて詳しいのは明らかなのだ。しかも、かなり。俺が睨むと、此の村は鼻を鳴らした。馬鹿にされているのだと気づく。

「ただ…一つだけ教えておいてやる」

「……何を」

「……」

少し間を置いて、此の村はハッキリと言いつつ切った。

「……私は浅葱空良の敵だ。発見次第、殺す」

第五話：理不尽

「おい、蘇芳。帰らないの？」

「うつ、え？」

「うつ、え？じゃねえよ。何回話し掛けたと思ってるんだよ」

俺は気まづくなって、取り敢えず謝る。

「わ、悪い。ちよつと、……考え事してて、」

川下はふうん、と胡乱な目付きで俺をじろじろと見詰めてくる。

「な、何だよ」

「何か元気がないように見えるのは俺の気のせいかな？」

ギクツ、と川下の鋭さにたじろぐ。

「そ、そんなことねえよ。気のせいだ」

納得はしたようにないが、川下は

「ふうん」と言って追及を諦めてくれたようだ。今の内にさっさと退散しようと、鞆を手取る。

「俺、帰るわ」

「え、三田村の見舞いに行くって言ってたじゃねえか」

「悪い、用事思い出したんだ！じゃな！」

「え、おいっ」

正直三田村の見舞いに行っている場合じゃない。だからと言って特に用があるわけでもない。俺はさっさととんずらした。川下は、まあ当たり前だが追いかけてくるようなことはなかった。

「あれ、真由理ちゃん」

「上総さん。今日はよく会いますね」

真由理ちゃんは校門に立ち、誰かを待っているようだった。

「今日部活は？」

「一応体育館でバドミントン部の日なんです、あまり体調がよくなくて。お休み貰っちゃいました」

「風邪？」

「…かもしれないです」

朝は元気そうだったのに。しかし言われてみれば顔が少し赤いような気がする。俺は腕を伸ばし、真由理ちゃんの狭い額に触れた。

「かつ、上総さん？」

「うーん、少し熱いな」

「……」

真由理ちゃんの顔が何故か更に赤くなる。

「あ、また赤くなった。本当に風邪かもね」

何気無く言った俺の言葉に、真由理ちゃんは何とも言えない複雑そうな表情になった。俺が怪訝そうな顔を見ると、

「上総さんって、結構鈍感ですよ」

と低い声で言われた。怒ってる？

「怒ってる？」

「…怒ってません」

真由理ちゃんはスツと俺から顔をそらし、素っ気なく言い捨てる。どうやらご機嫌斜めのようなのだ。

「誰か待ってるの？こんなところ突っ立ってたら更に悪くなるよ」

「友達です。私は大丈夫なので、上総さんはどうぞお先に」

「あ、うん」

さっさといなくなれ、と言われたのかと俺は少し寂しい気持ちになる。真由理ちゃんはそれに気づいたのか、慌てて言葉を発する。

「あ、あの別に上総さんのこと邪魔って言ってるわけじゃなくて、ただ上総さんも風邪引くかも、っていうか」

珍しくしどろもどろになるのが可愛らしく、俺は苦笑とともに彼女の頭を撫でた。艶々した黒髪の手触りがすごく良い。

「か、上総さんっ」

「分かったよ。気い使ってくれてありがとうな」

俺は苦笑しながら言う。

「真由理ちゃんも風邪ひどくならないように気をつけて。じゃあね」
「はい。さよなら」

俺はまだ止まない雪の下、歩き出した。

私は上総さんの背中を複雑な想いで見送った。少し寂しげな眼が頭から離れない。上総さんは、いつも何処を見てるんだろう。私と話していても、眼は何処か虚ろ。最近の上総さんは、何を考えているのかよく分からない。前はこんなことなかったのに。それには、私を呼び出した人が関係しているのだろうか。上総さんの前では“友達”と呼んだけれど、私は今から会う人のことを全く知らない。でも、上総さんのことで話があると言われたら是が非でも会わねばなるまいと思った。

「ご、ごめんなさい。お待たせしました……」

上総さんがいなくなつてから五分ほど経った頃、その人は現れた。私はまずその人の格好に驚いた。時は二月。季節は冬。誰もが白い息をはき、身を屈めなくなるこの時期に、その人は薄手のシャツとジーンズという格好で現れたのだ。見た目華奢で、肌は今も降り続ける雪のように白くきめ細かい。身長は私より三センチ程高いくらい。

「え、えつとあなたが」

「はい。真由理です」

その人は、私より幼く見えたが年齢なんて外見通りではないことはよく知っている。

「あなたが真由理さん。すみません、こんな寒い中、」

「前置きはいいません。早く上総さんの話をしてください」

我知らず強い声が出て、私は自分で自分に驚く。イラついているらしい。

「は、はい」

私は上総さんについて何の話を聞くことになるのか、不安で胸が一杯だった。

「…いつまで付いてくる気だ？」

俺は思わず苛立った声を上げ、振り返った。此の村紫が、やはり無表情で立っていた。平坦な口調で俺の問いに答える。

「お前が浅葱空良と接触するまでだ」

「だから、俺は浅葱が何処にいるかも知らないし、向こうだって会いにくるとは…」

「ないとは言い切れないだろう」

あっさり反問され、俺は大人げなく舌打ちをする。構ってられるかと投げ槍な気持ちになってまた歩き出す。やはり此の村は付いてくる。俺は苛立ちを紛らす意味も込めて、空を見上げた。雪はまだ止むことなく、ハラハラと地上に落ちてくる。掌で受け止めると、すうっと溶けて消えた。その儚さが何故か浅葱にかぶって、俺は苦笑する。

「……？」

不意に、また姿勢を感じて俺は立ち止まった。当然、此の村も立ち止まる。

「…浅葱？」

思わず親友の名を呼んだのを、此の村が聞き咎める。ガッ、と腕を取られる。

「なにす、」

俺は息を呑む。いつの間にか此の村がポケットナイフを取りだし、俺の首筋に突き付けていたからだ。うまい具合に人通りがないから良かったものの、下手をすれば警察ものである。

「浅葱空良、居るか」

此の村が言う。凜とした声で。

「貴様の大事な親友は此処だ。お前が出て来ないなら、こいつの首をかつ斬るぞ」

「ぐっ」

此の村のナイフを持っていない方の腕が、首に回ってきた。細腕からは想像できないくらい力の息が詰まる。何で俺はこんな目に逢っているのかと思う。此の村は油断なく周囲を見回してきたが、何の反応もないのを見てとると、俺を解放した。

「げほっ、い、いきなり何しやがる！」

此の村に鞆を叩きつけ、俺は怒鳴った。喉元がひりひりする。

「罠に使っただけだ…お前が浅葱の名を言うからだろっが」

「だからって…」

俺は呆れて項垂れる。そして何処かにいるであろう浅葱に、お前はどんな奴と知り合いになってるんだと叫びたい気分になった。

第六話：古傷

僕は一体何をしているのだろう。何が、したいのだろう。

「……あの、どうかしたんですか？」

「あつ、ご、ごめんなさい」

すぐに謝る癖も、ずっと変わらない。

「私は構わないですけど、何だか顔色悪いみたい……えっと、浅葱さん……でしたっけ」

……僕はこの子に本当の名前を教えていた。馬鹿だと思う。彼に、……蘇芳君に嫌われたくない・不気味がられたくない一心で、七ヶ月前は逃げ出したのに、またこの地に舞い戻っては蘇芳君に近い人と会っている。どうしようもない馬鹿者だ。目の前の子は、落ち着きはらった眼で僕を見ている。

「浅葱さんは、上総さんの知り合いなんですか？」

真由理さんは湯気の立ち上るマグカップを両手に持ち、訊いてくる。「知り合い……そうなのかな」

蘇芳君はまだ僕のことを友達だと思ってくれているのだろうか。あんな、常識を疑うような別れ方をして。ちゃんと挨拶も出来なかった。

「浅葱さん？」

「あつ、」

また真由理さんを置いて考え込んでいたらしい。一体僕は何をやっているんだろう……。嫌になる。

「すみません……」

「……」

真由理さんに見つめられ、思わず俯いてしまう。人から見つめられるのは苦手だけど、特に女の人はもつとダメだ。どういう顔をしたら良いのか分からなくなる。蘇芳君なら……

「浅葱さん……下の名前、もしかしてソラって言いませんか？」

「！どうして、」

もしかして、“彼ら”が迫っているのか？僕は緊張に鼓動を早くする。だが、真由理さんが続けた言葉は、違った。

「私上総さんとは家が近所で、仲良くしてもらってるんですけど、上総さんからあなたのことを聞いたことがあつたんです。浅葱ソラっていう仲のいいダチがいるんだ、って楽しそうに」

「…っ、」

胸が痛む。

「あまり詳しくは聞いたこと、ないですけど。中学で知り合つたことと、今言つたことと」

……つまり同じ高校に通つていたことを真由理さんには言つていないことになる。言つ必要はないと思つたのか？

「大体五ヶ月前くらい前に聞いたのかな。確か体育祭の練習が始まつたくらい頃だつたので」

「！？」

五ヶ月前？僕は耳を疑う。そんなの、僕がいなくなつて二ヶ月も経っているじゃないか。だから同じ高校にいたことを話してないのかそれに、あんな形で姿を消した僕のことを“仲のいいダチ”と真由理さんに紹介した。

…どうして、そんな

「あ、浅葱さん？泣いてるんですか？」

「じ、ごめんなさい」

真由理さんがいるのに、涙が拭つても拭つても止まらない。泣き虫なのも変わらない。

「上総さんには会わないんですか？」

当然の問いに、僕は咄嗟に返事が出来なかった。

「浅葱さん？」

「今日は会えないんです」

違つたろ、と僕は心中で自嘲する。会えないのではなく、会つては

いけないのだろうに。

「上総さん、喜ぶと思いますけど」

真由理さんは何処か素っ気ない口調でそう言った。夕闇迫る外に面したガラス窓に彼女の横顔が写りこんでいる。芯が強そうだ、と僕は何となくの感想を抱いた。真由理さんが腕時計を見て、慌てる。

「もうこんな時間。すみません、部活出ない日に帰りが遅いと親がうるさいので」

「そう、ですね。もう暗いし…」

家まで送ります、と言いかけて思い止まる。ダメだ、さつき蘇芳君と近所つて言つてたじゃないか。蘇芳君に会う危険がある。それを言うなら学校に行くのも不味いとは思うが、真由理さんに不信任を抱かれないためにはああした真由理さんが普段行き慣れてる、かつ大衆の視野の行き届く場所が良いと考えたのだ。

「浅葱さん、上総さんに会つのが怖いんですか？」

「…えっ？」

真由理さんが意味深に、微笑む。対象のすべてを見透かしたような笑み。僕は体を硬直させ、固唾を吞んで真由理さんを見返すしか出来ないでいる。真由理さんが、僕の胸元に指を伸ばしてきた。僕は動けない。指が、つうと僕のシャツの胸元をなぞる。

「真由理さん！」

「！あ、あれ？」

彼女の名を叫んだ瞬間、真由理さんが眼をパチクリとさせ、自分が何をしているのかに気付いて赤面する。

「えっ、ご、ごめんなさい。私何をしてるんだろっ…」

今のは、と僕は顔を強張らせる。ふわっ、と甘いオレンジのような匂いが漂う。真由理さんは、ごめんなさいっ、と礼をして一目散に去っていった。

「……」

僕はすとな、と椅子に腰を下ろす。

『可愛い鳴き声、お姉さんに聞かせてみなさい』

「……っ」

過去の古傷が痛む。体、心両方の。体に指が這っている感覚を思いだし、僕はただ俯いて耐えるしかなかった。

第七話：崩れていく日常

「だああつ、もうっ！」

俺はリビングに入るなり、鞆を壁に投げつけた。苛々はピークに達していた。理由は、当然此の村紫という女のせいだ。結局あいつは玄関先まで付いて来やがったのだ。

『私のことは気にするな。飯も排泄も関係ないしな』
何より言い方が下品だった。

「くそっ」

少しでもあいつと浅葱が似ていると思った俺は阿呆だ。浅葱はあんな物言いはしないし、他人を尾けたりもしない。全然、違う！！

「…洗濯もん、乾いてないだろうな」

お袋もいい加減乾燥洗濯機を買えば良いのに、と思う。

そして明らかに乾かない日に野外に干すのが今一理解出来ない。

取り敢えず頼まれ、引き受けたからにはやり遂げねば。俺は鞆を床に放置したままで二階に上がる。洗濯ものを干しているベランダは、南に面した姉貴の部屋にある。昔はお袋が部屋に出たり入ったりするために姉貴は嫌がっていたが、大学生になって家にいない時間が増えてからは一切苦情を言っていない。俺はベランダに出て洗濯ものに触れてみた。冷たい…いっさいがっさい乾いていない。俺はため息をつきながら、洗濯ものを取り込んでいく。これを部屋に干し直すことを思うと、なんとなくやるせない気持ちになった。

「よし、こんなもんで良いか」

リビングに洗濯ものを干し終え、俺はソファーにどっかりと腰を下ろした。指先が冷えてたから、両手で揉み合わせる。そういやカレ―を解凍しないといけないんだっただか。まあでもまだ腹は減ってな

いし、親父たちも遅いし準備は良いだろう。何してようか、と思いつながら鞆を漁る。何か宿題が出ていた気がするんだが…。数学だったか、英語だったか、と教科書を捲ったりしていると…。ピンポンと軽やかなチャイムの音がした。誰だろうか、と時計を見ると、午後五時半を回っていた。冬は日が短いから時間感覚がなくなる。

「はいはい」

ドアを開けると、

「真由理ちゃん」

真由理ちゃんだった。制服だから、今帰ってきたのだろうか。真由理ちゃんは唇を引き結んで、立っていた。目元が強張っている。

「真由理ちゃん…」

「上総さんをとられるみたいだから、言わないでいようと思ったけど、」

「は？」

「男の子に嫉妬してるなんて、恥ずかしいし」

真由理ちゃんは何かに急かされるように喋っている。だが、目元はぼんやりで。真由理ちゃんが何を言おうとしているのか…

「浅葱空良さんに会いました」

「なっ!？」

浅葱に、会った…? 何で真由理ちゃんと、浅葱が? 何故? 俺は混乱する。

「上総さんのこと、気にしましたよ。でも、会ったのが怖いみたいでした」

違う。脳内で何かが警鐘を鳴らす。今日の前にいるのは、真由理ちゃんであって真由理ちゃんじゃない。なら、誰だ? 真由理ちゃんがうつすらと笑う。

「お前、誰だ」

「場所はあ、辻村書店の横の喫茶店」

「真由理ちゃん、」

「確かか」

「！」

しまった。真由理ちゃんの異変に気を取られて、俺は此の村の存在を忘れていた。此の村紫は、静かに真由理ちゃんの背後に影のようにひっそりと、存在していた。

俺は真由理ちゃんを逃がすべきだと思ったが、此の村は真由理ちゃんに危害を加えることなく身を翻えして、さっさと駆けて行った。
「っ、」

絶対追った方が良い。浅葱が危ないという予感があった。此の村はハッキリと言っていた。浅葱を見つけたときは、殺すと。俺は真由理ちゃんを押し退けるようにして外に出ようとした。だが、

「上総さん、行かないで！」

「ちょ、」

ぐいつ、と襟首を掴まれ俺は真由理ちゃんの腕の中に引き込まれていた。真由理ちゃんらしからぬ行為に、俺は動転する。不意にオレンジの香りがしたが、香水かなにかだろうか。

「行ったら、だあめ」

「まっ……！？」

真由理ちゃんの唇が俺の唇に押し付けられた。突然の行為に、俺は為す術もない。

「っ……んっ！」

舌が口内に進入してくる。真由理ちゃんの手が、俺の足を撫で始める。
「……っ……！」

真由理ちゃんではない。でも体は真由理ちゃんで、俺は訳が分からない。もしかや二重人格とかいうやつか、と俺はそんなことを思う。だが真由理ちゃんの手が、ズボンの中に入ってきたときには激しく抵抗した。

「真由理ちゃん、やめろっ……！」

悪いと思いつながらドントと真由理ちゃんを押す。真由理はたたきに腰を打ち付けたが、痛そうな顔を全くしていない。俺は唇を袖で

拭って、はあはあと荒い息をはく。真由理ちゃんはやにやと樂しげに笑っている。

「誰だ、お前。真由理ちゃんに何をした!!」

「さあ、何でしょうか」

「くっ…」

「あ、浅葱空良を助けに行きたくて仕方ないって顔してるね」

「分かってんならそこを退けよ!」

真由理ちゃんは、スツと立ち上がった泰然と微笑む。その余裕のある笑みがかんに障る。

「安心して。浅葱空良を傷つけることはできても、殺すことはできないよ。此の村紫にはね」

「何…?」

「だから、安心して私と良いことしましょう」

「!?!」

真由理ちゃんがまた俺にキスをしてくる。俺は彼女を振り払おうとしたが、急に足から力が抜けて尻餅をついた。

「な、に…」

「良いから。次に起きたとき、何らかの結果が出てるから」

「…っ」

眼が霞む。意識が遠退く。真由理ちゃんが俺に指を伸ばしてくる。彼女が何をするのかを見届ける前に、俺の意識は完全にブラックアウトした。

第八話：迷いと、決断と

真由理さんと別れたあと、僕はどうしようかと惑っていた。本来ならすぐにここから離れるべきなんだ。第一、この町に来る必要は一切なかった。なのに僕は、懐かしい空気に触れたくて、蘇芳君に会いたくて。

…僕はなんてほんとに馬鹿なんだろう。だから、こんなことになっている。

「あつ、ぐ……」

「どうした、機械。故郷にいて勘が鈍ったのか？」

僕は解放を乞うように首を左右に振ろうとする。でも、頭を掴まれて固定される。

「っ」

「大好きな蘇芳上総に会いたい」

僕は眼を見開く。どうしてこの人が、蘇芳君のことを。まさか、

「す…お、くんにか、した…の、」

首を絞められている苦しさの下、僕はどうにか声を発する。背中がコンクリートの壁に押し付けられ、骨が軋む。

「少し話をした。お前のことを知りたいかと訊いたら、あいつ、必死な顔で頷いてたな」

「……っ！」

「ほらほら、力を使いなよ。ほんとに死んじゃうよ？」

「んっ、ぐっ……」

僕がされるがままになっている理由、それはー、

「ああそうか。力を使ったら“奴等”に居場所がバレてしまうものねえ」

だからだ。今僕の首を絞めている人も脅威ではある。ただ、僕がほんとに恐れているのは“滅死人^{シニガミ}”。“組織”にとって不要になった

構成員を処分する役目を担った人々のことだけど、その“滅死人”に命を狙われ無事だった者はいないというのが通説で、僕は数人いる中でも二人の“滅死人”に眼を付けられている。七ヶ月前に蘇芳君の前から姿を眩ませたのはそれが理由だった。蘇芳君と会って“感情”を手に入れてしまった僕は、“組織”にとつてただのお荷物になった。だから“組織”は僕を処分するべく、“滅死人”を送り込んできたんだけど、まさかそれが最強二人組というのは予想外で、っ、

まずい、このままじゃ、死ぬ。でも“力”を使えば、恐らく近辺に潜伏しているあの二人に感づかれる。この町であの二人と戦いたくはなかった。どこの町でも住人を巻き込むのは嫌だしダメだけど、この町だけは…蘇芳君だけは巻き込みたくない。たとえそれが、僕自身のエゴのためだとしても。

…一体、何が間違いだったんだろう。

この町に来たのがそもその間違いだったように思う。蘇芳君と初めて口をきいたあの放課後、不良たちの呼ぶ声を無視しなかったのが間違いだったのか。……違う。生まれてきたことがそもその間違いだったんだ。色んな間違いを僕は起こしたけど、でも、でもどうしても…蘇芳君と出会ったことが間違いだとは思えなかった。僕に“感情”を与えたのは蘇芳君で、“感情”を与えられたから僕は用済みの烙印を押され、逃げ回る日々を送っている。“感情”なんて与えられなかったら、僕は……まだたくさんの命を摘んでいたんだろう。笑いもせず、泣きもせず、怒りもせず、無慈悲な一撃を見舞っていたのだろう。そっちの方が良かった？こんな、こそこそ逃げ回る生活より人殺しのままが良かったのかな。

「……ま、だ…しね、ない」

僕は決断する。首を掴んでいる手に、爪をたてる。でもそれだけでは退いてはくれない。僕は右足で相手の膝小僧を蹴り付けた。出来るだけ“力”は使わない方向で行きたいけれど、

「痛くも痒くもないね」

逆に足を取られ、ぐざりと変な方向に捻られた。火を噴くような痛みが足首を駆け抜け、僕はぐもった悲鳴を上げた。

「はんっ」

いい加減首を絞めるだけなことに飽きたのか、僕は解放された。何の前触れもなく唐突だったから受け身も何もない。無防備にお尻から落下してしまう。僕は足首に振れた。折れてはいないが、痛い。既に患部が熱を持ち始めている。首も痛い。

「っ、は、げほっ、ごほっ…、くはっ」

地面に蹲り喘ぐ僕を、相手は仰向けに押し倒すと、胸のあたりに遠慮なく足をのせた。勢いがあり、ひゅっと掠れた声が漏れた。情けなさ過ぎる。

「…いつ、痛っ…」

「今のあんたじゃ、“力”出さないと私にも勝てないよ？」

僕は相手の足を掴む。掌に意識を集中させ、頭の中でマツチを擦って火を点ける様を強くイメージする。

「おっと、」

足から立ち上る煙に気付き、足が退けられる。急いで体勢を立て直し掴んでいた箇所を見れば、火傷が出来ていた。もう少し下、地肌ではなく靴下を履いている場所を掴めば良かったと僕は後悔する。

「敵の心配をするなんて余裕だなっ！」

火傷も何のその、女の子は僕に突っ込んでくる。抜き身のナイフを上段に構えて。

「っ…!!」

びゅっ、と耳元でナイフを振られ、咄嗟に避ける。だけど完璧に、

とは言えなかったようで頬に鋭い痛みが走った。

「はっ、はっ、はっ」

足首が痛い。触らなくても患部が激しく熱いのが分かる。女の子は、ナイフに付着した僕の血を舐め取った。にやぁ、と恍惚とした表情を浮かべる。

「…っ、」

もう“力”を使うしかないのか。僕は、どうしたら…良い？

「“力”を使って奴等に見つかるか、私に殺されるかお前には二つしか選択肢はないのさ」

ただの肉弾戦では、こちらには分が少ないのは分かっていた。でも、蘇芳君と過ごしたこの町を“滅死人”との戦闘で滅茶苦茶にはしたくない。

「早く決める。殺すぞ」

ナイフの切っ先が僕の心臓のあたりに方向を定める。僕は、決めなければならぬ。

蘇芳君なら、どうする？

第九話：過去と、焦燥と、

『浅葱って、最近よく笑うようになったよな』

俺は何気無い口調で、特に意図もなく言ったのだが、浅葱は眼を見開いて『え』と掠れた声を漏らした。てっきりそうかなあ、と流されると思っていた俺は、予想外の反応に少々面食らった。

『俺、何か変なこと言ったか？』

浅葱は眼を伏せ、俺から視線をそらせた。憂いをまとった眼が、桜の木に向けられている。季節は春。遅咲きの桜がようやく咲き誇った頃。そうだ、確か高校入試の合否結果を高校まで見に行った帰りだった。

浅葱と出会ってから七ヶ月ほど経っていた。合格を確かめた俺たちは直ぐに帰宅する気にはなれずに、中学に行き担任に報告を済ませた後で中庭に居座っていたのだ。一本の桜の木が鎮座しているだけの、特に面白味もない庭と呼ぶのも烏滸がましいくらいの空間。春休みで部活に励む下級生くらいしかおらず、構内はひっそりと静まっていた。

『お、俺、何かまずいこと言ったか？』

浅葱はゆるゆると首を左右に振る。そういつのじゃない、というところか。俺はううむ、と唸り浅葱を見ていたが、不意に浅葱の瞼がほんのり腫れていることに気付いた。そういえば一週間くらい浅葱とは会わなかったが…。

『おい』

俺の声音の変化に気が付いたのか、浅葱が微かに肩を震わせた。

『また吉川たちに苛められたのか』

『……』

沈黙が全てを物語る。吉川というのは、転校したてだった浅葱を校舎裏に呼び出した不良のリーダーだった。俺の前では浅葱に暴力を振るったり、金銭を巻き上げたりすることはないようだが影では何

をしているか分からなかった。でも浅葱に根掘りはほり聞くのはさすがに良くないと思って口出しはしなかったのだが。俺は顔を歪め、立ち上がった。尻についていた葉が地面に音もなく落ちた。

『ど、何処行くの』

笑うようになったとはいえ、口調は平坦なことが多い。今もそうだった。俺は浅葱に背を向けたまま怒りを押し殺して答える。

『…いい加減吉川たちにはぶち切れそうなんだ。一回しめといてやる』

吉川たちがいそうな場所には幾つか心当たりがある。今日もどうせそのうちの何処かにいるはずだ。それに浅葱だけでなく、吉川のグループに酷い目に遭わされた知り合いが何人かいるし、腸のにえくりはピークに達していた。

『だ、駄目だよ喧嘩は』

『喧嘩じゃねえよ。分かせてやるんだ、他人を痛め付けた奴は痛い目に遭うものなんだってな』

俺は止める浅葱を振り払い、その場を去ろうとした。だが浅葱の発した言葉に、足を止めることになる。

『誤解されるから止めてよっ！！』

『は？』

浅葱は俺を睨み付け、矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。

『し、知ってる？僕と蘇芳君があの人たちに何て言われてるか。蘇芳君が僕を助けるたびに、何て思われてるか知ってる？』

『お、おい』

『あいつらは出来てるって…』

その言葉と浅葱の涙に、俺は立ち尽くす。ぐうの音も出ない。

『ホモだって。蘇芳は浅葱を誰にも触らせたくないんだって。浅葱はそれを喜んでるんだって』

『あさ、』

『あいつらは男同士で出来てるんだって！蘇芳で良くて俺らじゃ駄目な訳？って……』

『！まさか、』

浅葱が泣く。声を上げて、泣く。『…蘇芳君が家の都合で何日間か休みをとったことがあったでしょ？そのとき、無理矢理、とじつ、こめられ…てっ』

『浅葱！』

『された。い、一杯気持ち悪いことされた。止めてっってお願ひしても、止めてもらえなかった…！』

俺は居ても立つてもいられず、浅葱の肩を掴んだ。浅葱はしゃくりあげ、涙をばろばろと溢す。

『何で俺に言わなかった！』

『い、言えるわけないよ。そしたら、絶対蘇芳君はあの人たちを暴行すると思つた。また、ホモだつて思われるつて、思つたから』

『…っ』

まさか吉川たちが俺たちのことをそんな風に思っているなど予想を遥かに越えていた。加えて、浅葱を襲つただとは。俺は、何も氣付けていなかった。何が“最近笑うようになった”だ。平和ボケも甚だしい。二の句をつけず、俺は木偶の坊のように突っ立っているしかない。浅葱はしばらく顔を伏せて泣いていたが、やがては真っ赤になった眼で俺を見た。

『僕なら平気だから。多分僕たちが高校に行ったら、向こうも手を出して来ないと思う。…ああいう人たちは、目の前に獲物がいなければ特になにもしないと思うし』

『で、でも』

『良いから。僕は、大丈夫だから』

俺は浅葱を見る。無理をしている風ではないが…。

『ごめん、僕、帰るね…』

こんなときまで浅葱の声音は平坦で。でも眼は今にも泣き出しそう

に歪んでいる。浅葱は鞆を掴むと、駆け出した。

『……』

浅葱の足は決して早くはなかったが、俺は追うことが出来ず一人桜の下に佇んでいた。

「……っ!？」

そして、今の俺。夢の内容に、というよりは激しい頭痛で眼が醒めた。しばらくは何も考えられず、ぼうっ、と天井を眺めていた。ああ、隅に汚れがある。でも脚立を使っても届かないなあ。

「!真由理ちゃん」

意識を失う前のことを思いだし、俺は慌てて上体を起こした。どうやら自分は自室のベッドで横になっていたらしい。

「あ、上総起きたの?」

「姉貴!？」

ドアを開けた矢先、姉貴の鼻っ面が目前にあり俺は驚いた。姉貴はむっ、と眉をしかめる。

「何よその言い方。あんたを運んでやったのはあたしだつての」
背が小さく小柄な姉貴ではあるが、力は何故か強い。親父より強いかもしれない。

「っていうか何だつて玄関で爆睡してたわけ?母さんが風邪ひくつて怒ってたよ」

「…今何時?」

姉貴がぴくっ、と頬をひきつらせたがちゃんと答えてくれた。

「午後十時半ですよ、弟様?」

「十時半!？」

俺は驚愕する。だって真由理ちゃんが家にやって来たのは五時半くらいだ。

「どうしたのよ、上総。具合悪いんじゃないの」

「なあ、真由理ちゃんいなかった？」

「真由理ちゃん？いなかったわよ。てか母さんに訊いたほうが良くない？」

「姉貴、俺今から出掛けてくるから」

「はあ！？ちよつと上総、もう遅いし顔色悪いからやめときなさい！」

姉貴に腕を掴まれるが、焦燥感に苛まれている俺はそれを振り払った。階段を下りる。

「あら上総起きたの？」

風呂上がりのお袋と出くわしたが、それも無視する。玄関で靴を履く俺に、お袋が声をかけてくる。

「上総！あんた何処行くの！」

「うるさい！浅葱が危ないかもしれないんだよっ！！」

俺の剣幕に、お袋も姉貴も口をつむった。

「だから、ちよつと出てくる」

「か、上総！」

姉貴の最後の呼び声を無視して、俺は家を出た。まだぼんやりする頭を抱えたまま、淡雪の舞う世界へ足を踏み出す。親友に再び会うために。

第十話：哀しみの再会

「こんなのによられ放題とは、一昔前の“瞬殺機械”も墮ちたものだな」

「う、げほつ、ごほつ！」

僕は咳とともに血も吐き出した。白いシャツと白い雪が赤く染まる。息を整えることもままならぬ内に前髪を掴まれ、上向かされる。細まった眼が冷徹に僕を見据える。

「な、風君、」

「お前に名前で呼ばれたくないな」

「っあ……！」

突き飛ばされ、僕は地面に倒れる。風君―僕が恐れている“滅死人”二人の内の一人―浅月風君は倒れて咳き込む僕を見下した後、風君が来るまで僕を痛め付けていた“組織”所属の女の人に歩み寄った。

「きつ、さま……我ら“組織”に楯突くのか……！」

頭から血を流し、右腕を折られながらも風君に怒鳴り付ける。

「誰の采配かは知らないが用済みになった“組織”の人間を処分するのはボクたち“滅死人”の役目だ」

「……っ、くそが」

「本当のことだろう。それに、あいつだけはボクが絶対に殺すんだ」その言葉が、僕の肺腑を抉った。

「今すぐこの場から去れ。どうしてもあれを殺すというなら、ボクに勝つてからにするんだな……」

「くそ」

毒づきを、風君は溜飲を下げたのかこちらに戻って来る。

「……“力”を使わないのは何故だ」

「……」

僕は風君を見るために顔を上げたが、

「顔は伏せてろ」

革靴の踵で頭を押さえつけられる。額が地面にぶつかり、激痛が走った。

「う、ううっ…」

「答える。“力”を使わないのは何故だ。そんなにボクに見つかるのが怖かったのか」

「…ば、僕はっ」

凧君から痛いほどの殺気を感じる。

「……怖い。凧君が怖い、でも」

「でも？」

「此处では、戦いたくない……！」

「は、ははははっ」

僕の心からの叫びは、凧君の哄笑に掻き消される。

「そうか、お前、確か前にこの街にいたことがあったよな！そして“感情”を知り、ボクたちに狙われる羽目になったんだっとな！思いでの地というやつか……！」

嫌な予感が心を蝕む。凧君が声を張り上げて笑うときは、何かが彼の狂気に触れてしまったとき――

「誰だ？お前に感情を教えた奴は」

「……っ！」

それだけは答えるわけにはいかない。腕や足を折られようが、眼を潰されようが、蘇芳君の名前を出すわけにはいかない。話したら最後、凧君は必ず蘇芳君を捕らえる。僕を、苦しめるために。

「ふうん、黙秘…か。生意気だな」

「いつ……！」

掌を踏まれ、にじられる。

「黙秘すればボクが諦めるとでも思ってるの？」

「あうっ、いつ…たい、」

「当たり前だよ。痛み付けてるんだから、痛く感じてもらわないと困るでしょ？」

凧君は僕の前にしゃがみ込むと、僕の胸ぐらを掴んで身を乗り出してきた。至近距離で、僕と凧君の眼が合う。

「…っ」

「言えよ。お前に感情なんて玩具を与えたのは、だ、れ、な、ん、だ」

「言わない、」

「あ？」

怯む弱気な自分を抑え、僕は拒否する。

「絶対に言わない！凧君には、言わないっ！！」

「…ふうん、そう。分かったよ」

凧君の琥珀色の大きな瞳が、嗜虐的に歪む。怒りのためか、白い頬にサツと赤みが走る。

「教えてくれたら、また逃げ回るチャンスを上げようと思ったのに。お前はいつまで経っても馬鹿で愚図だな」

「……」

「反論してみたら！？」

いきなり頬を平手で張られ、眼の前で火花が散ったような錯覚を覚えた。「っ」

「良い、分かったよ。そんなに死にたいなら今すぐ殺してあげるよ。大事な思い出の地でなあ」

凧君の右手が振りかぶられる。抜き身のナイフが月の光に反射して鈍く発光する。僕は迫り来る死の気配に怯えて、眼を力一杯瞑った。

「……っ！！」

「…？」

でも僕を死に導くような衝撃はやっては来なかった。焦らしている

のだろうか、と思いながら恐る恐る眼を開ける。

「あ、」

間抜けな声が漏れた。

「はっ、はあ、はあっ」

「な、んで……」

僕の前に、懐かしい背中があつた。凧君の、怪訝そうな顔がちらりと見える。

「俺の、…大事な親友に何しやがる……」

「……………」

「ぐっ、う」

「嘘、嘘！」

一番会いたかつたけど、今この状況で会いたくはなかった。一番巻き込みたくない人だったのに…。

「そうか、お前か」

納得したように呟き、凧君は、蘇芳君の脇腹に刺したナイフを無慈悲に抜いた。鮮血が吹き出し、蘇芳君の体が力なく倒れた。

「あ、」

「あさ…ぎ、」

「蘇芳く、ん。どうして、ここに……」

そんなこと訊いてる場合じゃないのに。早く救急車を呼ばないと。立て。早く。凧君の楽しげな声が鼓膜を、心臓を、震わせる。

「こいつか。こいつがお前に感情なんて玩具を与えたんだな。く、くくくつ、良いものを見せてもらった。素晴らしい友情だよ、あはははははははっ！！」

僕はガタガタと震える手で、傷口に触れる。蘇芳君の体が痛みで痙攣する。

「何で、こんな…」

「お前のせいだろう」

「っ！」

凧君はナイフを鞘に戻しながら、冷たい眼で僕と蘇芳君を交互に見

た。

「貴様が下らん郷愁を抱いてこの街に戻ってきたからこんなことになった。そいつが血だらけで転がってるのは、お前のせいだ」

「っ！！」

……本当はこの街に来る必要はなかった。たまたま近くに来ただけなのに、僕は抗えなかった。たった二年しかいなかった場所なのに、その目的だって、“組織”に指示された視察でしかなかったのに。なのに、僕は。

「大サービスで救急車は呼んでやる。あとは好きにするんだ……お前を殺すのはまた別の機会に取っておくよ」

陰鬱に笑いながら、凧君は去っていく。携帯電話を片手に。

「……」

蘇芳君は、ぜえぜえと荒い息を繰り返し虚ろな眼差しを僕に向けているだけ。

「…な、」

「…、」

「ま…た、あ…えた、な」

「っ！！」

また、会えたな。

「どうして、そんな…ことっ！！」

僕のせいなのに。僕のせいで刺されたのに。七ヶ月前、あんな別れ方をしたのに。

「…どうして、」

蘇芳君が悲し気な眼で僕を見ている。蒼白な顔。白い呼気も徐々に弱くなる。

「……っ、てしん…ゆ、う…だろ」

だって、親友だろ。

「っ、」

もう駄目だった。涙腺が決壊したかのように、涙が止まらなくなった。僕は声を上げて泣いた。蘇芳君にまだ親友だって思われている

と知ったこと、僕をかばって刺されたこと、僕が戻ってきたからこ
うなったと凧君に言われたこと、すべてのことが重なって、僕の心
は押し潰されそうになっていた。

「う、うわあああっ！」

心の底からの声を上げて泣く僕の耳に、微かにサイレンの音が響い
ていた――――

第十一話：逃げた訳じゃない

浅葱が泣くのを見るのはこれで三度目だな、と俺は遠ざかる意識の中で思っていた。

一回目は、高校入試の合格報告に行った、春休みの中学校で。

二回目は、あの七ヶ月前の別れの時。

そして三回目は、いま。俺が刺されたとき。浅葱の光のない眼から、何滴もの涙が溢れ落ちる。泣かせた罪悪感が、俺を苛む。浅葱が何か言っているが、よく聞こえない。聴覚が完璧に麻痺している。次いで、何本もの足が視野に映り込む。見れば、真っ赤な光が夜を赤に染めている。微かに積もった雪が、血みたいに見える。赤いのは、救急車のランプらしかった。

誰かが救急車を呼んだのか。

周囲には人だかりが出来ているが、浅葱は座り込んだままだ。

寒さのせいか、小さな体が小刻みに震えている。

きつとズボンも濡れてぐしゃぐしゃになっているに違いない。

風邪ひくぞ、と言ってやろうとしたところで浅葱が救急隊員二人に肩を掴まれた。俺も担架に運ばれそうになる。治療を拒むわけではないが、何となく浅葱を保護されるのはまずい気がした。理由なんてなくて、ただの直感だ。浅葱は俺を見つめたまま、身動き一つしない。なのに涙は涙腺がぶっ壊れたかのように流れ続ける。

「あ……ぎ、」

辛うじて出せた言葉はそれだ。

我ながら情けなくなるが、腹を刺されたのだ。

誉めてほしいくらいだ。それに刺された直後くらいに話したし。ぴくり、と浅葱が反応し、眼が覚めたみたいになる。救急隊員を見上げ、怯えたように隊員の手を払う。聴覚が馬鹿になっているから、浅葱が何を喋っているのか、全く分からない。声も満足に出せない。俺は大人しく担架に運ばれるだけで、何も出来ない。久しぶ

りに会ったのにこれかよ、と俺は内心、臍を噛む。救急車に乗せられ、隊員に声をかけられる。だが聴覚が死んでいるから、口パク。俺には全く意味を成さない。それより腹が痛い。痛すぎて笑えてきた。

「……………」

だから聞こえないつつの。くそつ、つつか誰だよ、浅葱をあんなに痛め付けた奴は。絶対に仕返ししてや。俺は俺を刺し、そして浅葱を痛め付けた女顔のあいつを罵倒しながら、意識を失った。

「君は大丈夫？」

そう声をかけてきた男は、てっきり救急隊員の一人かと思っていた。僕は放心状態で彼の言葉を聞き流し、蘇芳君を見ているだけだった。でも蘇芳君が何か言いたそうな顔で僕を見て、途切れ途切れに僕の名前を呼んだ時、僕の中で何かが警鐘を鳴らした。でも気づいたときには遅くて、同じ格好の二人組に両腕を拘束されていた。

「…ちよ、放し…っ」

「静かにしろ。…しかし手酷くやられたな、此の村紫」

「！？」

僕を襲撃し、凧君に打ちのめされた女の人とこの男たちは知り合いのようだった。僕の前に、その人―此の村紫さんが立った。彼女も頭から血を流す程の怪我なのに、蘇芳君を救急車に乗せた救急隊員たちは此の村さんに一切の注意を払わなかった。どうして、と僕は混乱する。その混乱が分かるのか、此の村さんがふん、と鼻を鳴らして不敵に笑った。

「今の奴等は“滅死人”の息がかかってるからね。どうせ私は放置していいとも言われたんだろっさ」

忌々しげに口元を歪め、地面に血の混じった唾をはく。

「さ、て。あんたはどうしようかな」

「…っ」

身動き出来ない僕を、此の村さんが舐めまわすように見る。拘束を振りほどこうとしても、体と心の疲弊でうまくいかない。

「はな…してっ、」

蘇芳君があんな状態で必死に僕に危機を教えようとしてくれていたのに、僕はもう捕まっている。情けなさに涙が出そうになる。

「良いね、その今にも泣きそうな顔。私女だけど、何かそそられるなあ…」

「ひっ、」

首筋を生温い舌で舐められ、思わず悲鳴を上げた。膝が笑う。

「ひっ、だって。感情なんて知らなかった昔とは違うね。…蘇芳上総のせいかな？」

僕は恥ずかしくて居たたまれなくなる。救急車で運ばれ、僕より重傷の蘇芳君に、心の中で助けを求めてしまう。

「どうする？此の村。このまま拘束するか？」

救急隊員の格好をした“組織”の人間が、此の村さんに問う。その間も、僕を拘束する手の力は緩まない。此の村さんは頭から血を流したままで黙考する。…痛くないのかな、と僕は場違いにも相手の心配をしてしまう。

「うーん、それでも良いのだけどね」

此の村さんが行動に移る前に、何とかしてこの場から逃げ出さなければ。周囲にいる野次馬は“組織”の人間だとはすでに気づいているから、包囲網は強硬だ。だけど、このまま指をくわえて“組織”に連れ戻される訳にはいかない。僕は呼吸を整えて、行動するタイミングを狙う。が、

「解放してやれ」

「えっ、」

「何だ、嬉しくないのか。あ？」

「な、何で…」

此の村さんはふふんっ、と鼻を鳴らして僕を突き飛ばした。なすす

べもなく地面に倒れた僕のお腹を無造作に蹴ってきた。

「うつ、ぐつ……！」

「弱ってるのをいたぶるのも好きだけど、今日は興醒めした。だからまた逃げる時間をやる。逃げて逃げて、…死ねば良い」

僕の心に、此の村さんの言葉が無慈悲に響く。

「七ヶ月前に蘇芳上総の前から逃げたみたいにな…ねえ」

「ちがつ、逃げた訳じゃっ……」

「黙れよ、卑怯者」

此の村さんは僕の言葉を一蹴し、途端に憑き物が落ちたかのように無表情になった。

「行くよ」

乾いてこびりついた瘡蓋を剥きながら、此の村さんは二人の部下を引き連れて立ち去る。その背中では二度と僕を振り返ることはなかった。

「ちが、僕は…逃げた訳じゃない……」

小さく呟きながら、僕は溢れる涙を止めることが出来なかった。

第十二話：通り魔と組織（前書き）

約1ヶ月ぶりの更新：。

第十二話：通り魔と組織

俺が眼を覚ましたとき、一番に眼に入っただのは不安に押し潰されそうな顔をしてお袋だった。

「あ、お袋だ……」

「な、何があ、お袋だ、よっ……!」

鼻を遠慮会釈なく摘ままれ、俺は眉をしかめた。

「痛い……」

「痛い、じゃないわよ馬鹿!どれだけ心配したと思ってるの……!」
あとは言葉にならなかったらしく、お袋はわんわん泣き出してしまった。しかも俺の腹に突っ伏して泣くものだから、圧迫感に俺は唸った。取り敢えず落ち着いてもらうべく、背中を撫で擦ってみる。

「悪かったよ、お袋……。だから泣くなって」

泣いているお袋は本当に久しぶりで、どう慰めたら良いのか皆目検討がつかない。ついでに言えば今が何月何日何時何分なのかも皆目検討がつかなかったが。

「……そっぴや俺、どうして病院で寝てるんだ?と疑問が湧いた。やばい、何かとてつもなく大事なことを忘れてるような気がする。何だ?思い出せよ、俺……!」
「お袋、俺、どうして病院で寝てるんだ?一体何があったんだよ」

お袋はようやく体を起こすと、真っ赤に充血した眼で繁々と俺を見つめた。

「な、何だよ」

「……ショックで覚えてないのね。あんた、通り魔に刺されたのよ」
その言葉に、俺はぽかんと大口を開けてしまった。通り魔?と胡乱な口調でおうむ返しをする。

「犯人も捕まったけど、あんたが通り魔に刺されて重傷って警察から電話があったときには、本当にびっくりしたんだから!」
またお袋は泣き出してしまい、俺は途方に暮れる。通り魔、という単語が

脳裏をぐるぐると回り俺を混乱させる。見知らぬ誰かに刺された、
と言われても現実感なんて早々に湧くものじゃない。それに……、
誰かが泣いていたような気がする。とても大事な人が、泣いていた。
久しぶりに会えたのに、哀しい再会だった。

「でも良かったわ、ちゃんと起きてくれて」

お袋の言葉に、俺はうやむやに頷くしかできなかった。

「良かったのか、此の村。浅葱空良を解放して」

“組織” 本社二階ロビー。医療室から退室した此の村紫を一人の男
が出迎えていた。二十代後半くらい、痩身の男だ。眼の具合が悪
いのか、左眼に眼帯を施している。此の村は無表情で答える。

「……あれは弱り過ぎていた。勝負にならん。それより漣、^{やうなみ}眼の調
子はどうだ」

「明らかに話題を逸らしたな……。……眼は順調だ。痛みも随分和ら
いだ」

「そう。良かった」

「お前の口調は平坦だから、あまり嬉しそうには聞こえないな」
漣が口元を緩めて発した言葉を、此の村は鼻を鳴らして黙殺する。

「……………」

「はあ。……まあ良いけどさ」

呆れたような同僚のため息も、此の村紫という少女には何の感慨も
与えない。

「無駄話は終わるか？三田村局長補佐に呼ばれているんだ」

「無駄話……か。良いよ、行けば？」

彼がそう言い切る前に、既に此の村紫は歩き出していた。怪我など
何のその、つかつかと何の迷いもない確たる足取りで。漣秋夜は、
憂いたため息について彼女の小さくなる背中を見送った。

“組織”。具体的な呼称のないその機関は、しかし日本国内閣首相直属である。内閣府は通さない、完全に首相が采配を振るう機関。その存在を知る者はごく微少で、官僚ですら知らない者は多い。創立の詳細はいまだ不明なことが多く、戦後のどさくさに紛れて…という説が強いが、GHQの支配下に置かれていた当時の日本国にそれが可能だったか疑問視する声もある。

構成のトップは当然内閣総理大臣。その下に首相を補佐する審理及び補佐局が置かれ、あとは実行部や処理部、監査局などが配置されそれぞれの役目を担っている。官僚は勿論日本国民、諸外国にも隠し通すべき存在のため、構成員は少なく厳選されたメンバーのみのため役柄を兼任している者も多い。

「失礼します」

実行部強行課の構成員、此の村紫は同時に監査局の調査員の肩書きも持っている。その此の村は、“組織”本社七階、審理及び補佐局の局長補佐室の前にいた。ドアの向こうから、入れという低く重厚な声が此の村を招き、入室する。

「此の村紫、ただいま参りました」

「怪我の具合はどうだ」

監査局局長補佐の三田村寛治が、重厚なマホガニー製のデスクに座って書類仕事をしている。顔を上げようとしてもしない。だが此の村は構わない。

「処置は終わりました。問題ありません」

「そうか。・・・浅葱空良を逃がしたそうだな」

返事にかぶせるように三田村が言う。此の村は応えようとするが、第三者の息遣いを感じて口を閉ざした。顔を上げないながらも気配で察したらしく、三田村が素っ気無く言う。

「心配するな。愚息だ」

「成る程・・・」

父親の足元、高校生くらいの私服姿の少年が蹲っていた。

「私に会いに来たが、生来の喘息が出てね。医者に診せるのも面倒だから放っておいている。機密を漏らす心配もない。だから無視している」

「う、げほ、げほっ……!!」

喘息？と此の村は内心で怪訝に思う。喘息の苦しみ方とは違うように見えるのは自分の気のせいなのだろうか。どちらかといえば腹やどこかを殴られるか蹴られるかして痛みに咳き込んでいるように見えるのだが。

「私を疑っているのか？」

平淡な口調。此の村も平淡に答える。

「いえ。補佐が良いならそれで結構です」

「うむ」

ようやく三田村が顔を上げる。肉付きのいい、壮年の男が細めた眼で此の村を睥睨する。

「いいザマだな」

「ですね」

「……浅葱空良を逃がしたのは何故だ」

微かに漂う苛立ちの調子。だが此の村は涼しい顔だ。

「楽しくなかったからです。あの時の浅葱空良は弱すぎた。弱者を甚振るのも一興ですけど、どうも興が削がれまして」

「……期限付きと言ったはずだがな」

「まだ期限ではないでしょう」

「この日本国に、一体どれくらいの“罪人”がいると思う」「数えたことがないので分かりません」

「だが日本国のために“罪人”は早く処理せねばならんことは分かるだろう」

募る苛立ち。此の村の涼しい表情に変化はない。

「はい、承知しております」

「ならば……!」

大きくごつごつとした手が、机の上を叩く。踞った息子がひいつ、

とか細い悲鳴を上げたのを此の村の耳は捉えた。

「何故浅葱空良を処理しなかったんだっ！！弱っていたのなら殺すことだって可能だったはずだ！！」

顔を真っ赤にして怒鳴りつける。

「……………だから申し上げています。詰まらないからと」

「貴様はっ……」

「お話はそれだけですか？それだけならば退室させていただきたいのですが」

此の村はハッキリとした口調でそう言い、返事すら聞かずに身を翻した。三田村は射殺さんばかりの眼で彼女の背中を睨んでいたが、引き留めるようなことはしなかった。

「くそが……！！」

そんな呻きにもたた声を背に、此の村はドアを閉めた。

第十二話：通り魔と組織（後書き）

久しぶりにこの作品を投稿しました。さてさて、浅葱空良君はあれからどうなったのでしょうか？

第十三話：それぞれの転換期（前書き）

ちよつとあれな部分あり。マジでちよつとね（笑）

第十三話：それぞれの転換期

「あ、あんたかあ。通り魔に刺されたっちゅう若者は」
「へ？」

同じ入院患者のお爺さんにそう声を掛けられたのは、俺が目覚ましてから三日後のことだった。朝御飯を食べ、傷の痛みもなく手持ち無沙汰をもてあまし院内を徘徊していたのだ。

「俺？」

「いかにも」

腰を屈めた小柄なお爺さんだった。目は柔和に微笑んでいるが、どこか抜け目のなさを感じさせた。

「まあ、そうらしいっすね」

通り魔に刺されたという実感のない俺は、そう言うしかない。するとお爺さんは興味深そうに俺を繁々と見てきた。奥二重の目が輝いて見えるのは俺の気のせいだろうか。

「ジューズでも飲まんかね？君に興味があるんじゃが」

「？」

俺に？興味？通り魔に狙われる人間に、ってことか？

「俺が通り魔に襲われた瞬間を聞きたいなら無駄ですよ？瞬間のこ
と、覚えてないんで」

それだけ言って、俺は病室に戻ろうとした。その俺の背に、お爺さんの声がかかる。

「お前さんの病室の前に、何回か同じ少年が来ていたことがあるよ」
「！？」

その言葉に、足が止まる。何で俺の病室を知っているのか、同じ少年とは誰なのか、そんな疑問は浮かばなかった。

「ふむ、」

お爺さんに歩み寄る。

「爺さん、何か知ってるのか！俺が刺されたことで、何かっ……！」

！

切羽詰まった俺が矢継ぎ早に話しても、お爺さんは好好爺とした姿勢を崩さない。

「いや、主が刺されたことについては何も知らんよ。ただ、その少年は決して病室には入らんくてね。主とどういった関係か気になっただけじゃ」

「少年……？」

何だろう。頭がチクチクする。何か、大事なことを忘れているような。

「可愛らしい子じゃったよ。いつもおどおどした感じでね。主の病室の前に行つては、中に入るか否か迷つて、結局入らんで哀しげに俯いて去っていくだけじゃった」

チクチク、チクチク。針で頭を刺されているような、感じ。――蘇芳君に会えて、良かった……。

「っ！？」

何だ？今、誰かの声が聞こえた。誰、だ？

「……あさ、ぎ？」

ポロツ、と戦慄く（わななく）自分の口から、出たその単語。「浅葱――！」

思わずその名を叫ぶ。当然のように響いた声に入院患者も看護師も振り返る。だが俺にはそれどころじゃない。

「爺さん、あんた浅葱のこと知ってるのか！？」

相手がお老体ということも忘れて、俺はお爺さんに掴み掛かろうとした。だが、

「っ、」

通り魔に刺されたという傷のあたりに激痛が走り、片膝を付く。

「意気がるのも良いが、まだ完治はしとらんじゃろう？無理はいかんよ」

「っ、あんた一体、」

「まだ少し早かったようだな。……また顔を見せるから、今は傷の

治療に専念するが良からう」

爺さんは俺を置いて立ち去ろうとする。

「ま、てっ……！！」

浅葱の泣き顔が頭に浮かぶ。今も何処かで一人、泣いているかも知れない。俺の思い込みかも知れないが、俺を待っているかも知れない。だから目の前の爺さんが浅葱の何かを知っているのなら、何としても聞きたかった。なのに、

「蘇芳さん、何してるんですか！！」

担当の看護師さんが俺に気付いて駆け寄って来る。

「くそっ、」

俺は心中で親友の名を叫んだ。

「！！」

蘇芳君に呼ばれた気がして、僕は顔を跳ね上げた。その拍子に、蘇芳君が入院している病院が目に入って、僕は胸の痛みにもた顔を伏せる。蘇芳君に会いたい。でも、会えば僕は居心地の良さに身動きが取れなくなりそうで怖い。それだけは駄目だ。ひとところに届まることは、今の僕にとっては死を意味する。それに何より、蘇芳君にこれ以上は迷惑を掛けたくないから。そう、思うのに。足は動いてくれない。会いたいという気持ちはますます強くなる。でも、どちらにしても会うことはできない。もう、この街を離れるべきだ。そう、頭では分かっているのに。

「おいお前」

「え？」

誰かに呼ばれて振り返った瞬間、自分の顔が強張るのを感じた。何故ならそこにいたのは、

「……久しぶりだな、浅葱」

「！！」

中学生の時に同じ学校の生徒であり、度々蘇芳君と喧嘩をしていた、
「よ、吉川く、」

体が恐怖に固くなる。足を這い回る指の感触がありありと蘇ってきて、僕は吐き気に襲われる。

「相変わらずほっそいなあ」

吉川君は下卑た笑みを浮かべて僕の腕を掴んで来た。お酒でも飲んでいのか、酒臭い息が顔面にかかる。

「な、何でこんな時間に、」

「ああ、俺学校行つてないから。プー太郎してます」

そしてゲラゲラと天に向かって笑う。

「は、放して……っ」

「んなつれないこと言つなよ。久しぶりに会つたんだー少し遊ぼうぜ」

僕の腕を掴んでいない方の手で、群衆の目前で僕の足に触れてきた。

「やだ、止めろっ!」

思わず叫び、吉川君の腕を振り払った。もう中学生の頃の僕とは違うことを知らしめなければ。そう思ったから。

「へえ、中学んときは泣いてるだけだったのに、反抗的になったもんだな。力もついたみたいだし」

でも吉川君は怯むことなく、

「っ!!」

いきなり僕の前を握ってきた。痛みにも前屈みになる僕の耳元に囁かれる。

「あの日みたいに俺と良いことしようぜ?」

「嫌だっ、」

じろじろと通りすがりの人達が僕達を不躰に見るけど、誰も僕を助けてくれそうにない。

「な、良いだろ?」

ぞわつと背中に悪寒が走り抜け、足元が覚束無くなる。

「嫌だつて言つてるじゃないかっ……!!」

「照れるなよ、俺たちの仲じゃん」

腰に手が回ってきた。振りほどこうとしても、体に力が入らない。焦りと恐怖に支配された頭で、蘇芳君がいる病院を見上げる。助けて、と心の中で助けを呼ぶ。

「止めるよ」

だが助けは、蘇芳君によつてではなく、見知らぬ人によつて入った。「い、いででででっ！」

涙の浮いた目で見れば、吉川君が制服を着た男子高校生によつて腕を捻り上げられていた。眼鏡の下の冷めた瞳が、僕に逃げると伝えている。

「あ、あの」

「早く行きなよ。また襲われるよ」

僕はは、はいつと頷き、高校生さんに礼をして、駆け出した。とにかく今は吉川君から離れる。それしか頭になかった。

「行つた、かな」

珠洲村^{すずくむら}朔は、小さくなる背中を最後まで追わずに酒臭い同い年くらいの私服姿の少年を解放した。

「っ、てめえ何しやがる！！」

少年の怒声に通りすがりが顔を向けてくる。だが朔はそんな注視には目もくれずに、立ち去ろうとする。

「おいお前、人の話を聞いているのかよ！！」

吉川が朔の肩をぐいっと掴んで来た。朔の顔には一切の色がない。温度のない瞳で吉川を見上げ、

「死にたいなら冥土の土産に聞いてやる」

とはつきりした口調で言い切った。吉川がギクツ、とひきつるほど朔は不気味だった。細身の体から危ない何かが立ち上っているかのよう^{よう}に思え、吉川はそれ以上突っ掛かる気にはなれなかった。

「……… 必要がないなら失礼する」
「……… はい」

丁寧な返事で朔を見送る吉川だった。

歩きながら、朔は思う。

（あれが浅葱空良か。人相もあの方からの情報と一致する………）
まさか出会いが変態からの救助になるとは。因果な巡り合わせに、
朔はその整った顔に微かな苦笑を浮かべた。

第十三話：それぞれの転換期（後書き）

ね、ちょっとでしたよね？（笑）

第十四話：上総の母親と珠洲村朔

「ほんとに大馬鹿者ね、あんたは!!」

二時過ぎに面会に来たお袋の第一声はそれだった。傷に響いて、俺は顔を顰める。

「お袋、悪い・・・傷に障るから声のトーン下げて・・・」

呻くように言うと、お袋は自業自得よ、と最もなことを言ってくれた。うん、こつもはつきりといってもらえるとある意味感動だ、と俺は一人感心する。

「全く、ちよつと歩けるようになったと思つたらすぐこれだ・・・家に息子さんが大変ですつて電話があつた時はどうしようかと思つたわよ・・・」

「・・・悪い」

お袋は見舞いの品だろう、果物を袋から出してパイプ椅子に腰かけた。果物ナイフで桃の皮を剥きながら、

「あんた他の患者さんと言い合つてたんだって？」

「言い合つてなんかないよ・・・ただ、変なじいさんだったから、」

「変なじいさん？」

「・・・変つていうか、俺に興味があるつて近付いて来たんだ」

お袋はますます眉を寄せる。眉間に更なる深い皺が刻まれるのが偲びないが、口に出すと叩かれるに決まっているので、口には出さないことにした。傷が開くのは一回で良い。

「興味ですつて？」

「・・・俺が通り魔に刺されたつていうこと知つてたらしくつて・・・」

「・・・」

お袋は桃を綺麗に切り分けて、俺に渡してくれた。サンキュ、と言

いながら受け取った桃を食べると、みずみずしいそののおかげで渴いていた口内が潤った。

「そんなに広まってるの？」

「・・・さあ。面と向かってそう言ってきたのはそのじいさんが始
めてだったから、何とも」

「……………」
「そう。で、それから？」

「……俺の病室の前に、何回か同じ少年が来ていたって、言われた」

ぴくり、とお袋の頬が微かに引きつる。何か検討が付いているのだ
ろうか。

「でもその少年は決して中には入ろうとしなかったって」

「あんたは、」

┐
?
└

「あんたはその少年とやらの検討が付いてるの？」

お袋の口調は何処か固い。俺はそれを不思議に思いながらも、応える。俯いて、

「……浅葱、だと思う」

あのじいさんの言っていた外見や特徴は、恐らく浅葱だ。七ヶ月前俺の前から姿を消した親友。俺に、別れを言いに来たあの夜の光景がまざまざと蘇る。そして、今も目にちらついて離れない七色の閃光。

「浅葱君、ね」

お袋は小さく呟くと、椅子から立ち上がった。

「お袋？」

「手が汚れたから洗ってくるわ。何か飲みたいものある？」

「いや、別に。．．．何か顔色悪いように見えるけど、大丈夫か？」

「あんたが心配掛けさせるからでしょう」

「……だから悪かったって。大人しくしてるから……」

「そうは言いながらも、俺はあのじいさんを探すつもりでいた。そし

て浅葱のことを訊くのだ。そうしないと気になって気になって療養どころではなかった。

「また病院の方に迷惑かけたらどうなるか分かってるわね？」

につこりと笑いかけられて、俺は寒気に体を震わせた。

「わ、分かっておりますお母様」

「よろしい」

お袋は満足げに頷いて、病室を出て行った。俺はふう、と溜息をついて背もたれにもたれた。

三分くらい闇雲に走った僕は、もう大丈夫かと思って立ち止まった。緊張状態で走った所為か、息切れが激しい。

「はあ、はあ、はあっ・・・・・・・・・・」

他の人の邪魔にはならないように、道端によつて息を整える。後ろを振り返るが、吉川君も、僕を助けてくれた人の姿もない。追って来ている気配もない。

「今の、誰だっただろう、」

もつとちゃんとお礼を言いたかったのに、と僕は悔やむ。吉川君に痛い目に合わされていないだろうか心配になる。でも、頭の中では大丈夫だろうと思っている。あの、一切温度の感じられない冷たい瞳。凧君にも通ずる瞳だった。

・・・・・・・・・・まさか、“滅死人”の関係者？

「・・・・・・・・そんな大層なものではないよ」

「っ！？」

いきなり耳元で囁かれて、僕はギョツと身を引いた。全く気配を感じ

じなかったから。

「無事逃げ切れたみたいで良かった」

平淡な口調で言われても、今一喜べない。それでも僕はお礼を言わなければ、と焦った。

「あ、あの、さっきは……」

「お礼は良い。……君に訊きたいことがある」

「な、何ですか？」

「君、浅葱空良？」

「……」

僕の名前を知っている。そう知った途端、僕は僕の中の危機感が最高潮に達したことに気付いた。突き飛ばして逃げようとしたけど、それより先に発された言葉に、思わず足を止める。

「蘇芳上総に会いたいんだろう？」

「……え？」

「会わせてあげようか？」

「……」

僕は戸惑いを隠せず、警戒心を消さないままに相手を見つめる。

「……ああ、君の名前だけ知っていて僕の名前を教えないのはフェアじゃないね。……僕は珠洲村朔。朔、で良いよ。……君が襲われているのを助けたのは、殆ど偶然。定期検診の日で病院に行こうとしてね。君が嫌がってたから、助けた。打算もあったけど」

名前以外にも色々なことを話して来る。この人は、一体、

「どうなの？会いたいの、会いたくないの。蘇芳上総に迷惑がかかるとか、この街がどうこうなるとか、そういうことは考えなくて良い。君が、蘇芳上総に会いたいか会いたくないか、それを聞きたい」
真剣な瞳で見つめられ、僕は満足に息をすることも出来ない。何でそんなことを訊くのか。蘇芳君とどういう関係なのか。それに、

「会える……の？」

「……」

「蘇芳君に会えるの？」

素直にそう訊く僕を、僕は心の中で嘲笑う。まだお前は期待しているのか。蘇芳上総と以前のように親しく出来るだろう、と。

「・・・会いたい、と」

「あの、あなたは一体・・・」

「警戒してるね。・・・ただ敵ではないよ。今の所はね」

「・・・」

不意に、眼の前の人とどこかで会ったことがあるような気がして、思わずまじまじと相手を見る。

「何」

「あ、い、いえ・・・」

「君が蘇芳上総に会いたがっているのは分かった。ただ、それには条件がある」

「・・・条件？」

嫌な予感が急速に膨れ上がる。“滅死人”に投降しろ、とも言われるのか。僕は息を呑んで言葉を待った。

「・・・蘇芳上総に一目会ったら、すぐにこの街を出て行く」

「！！」

「これが、君が蘇芳上総に会える条件だ。・・・この条件を呑まないなら、面会をさせることは出来ないよ」

「一目、っていうのは、」

「そこまで詳しくは言われてない・・・でも、そんなに長い時間ではないことは確かだね」

僕は口を閉ざし、考える。蘇芳君には会いたい。会って、七ヶ月前にあの日に、あんな形で姿を消したことを謝りたかった。蘇芳君があのことかをどう思っているのか、僕がいなくなったことをどう思っているのか知らない。もしかしたら清々したとも思っているかもしれない。・・・でも、久しぶりに会ったあの時、蘇芳君は僕を風君の攻撃から庇ってくれた時、この人は自分を待っていてくれただと実感していた。気のせいかも知れないけれど。ただの勘違

いかも知れないけれど。

「・・・・・・・・・・蘇芳君に、会わせて下さい。少し言葉を交わしたら、直にこの街を出て行きます。約束、します」

本当は、ずっとこの街にいたい。また学校にも行きたい。皆で勉強して、皆でスポーツをして、時々まじめに話し合ったり、時々喧嘩したり、したい。人間らしく、過ごしていいたい。・・・・でも、僕は知っている。僕が此処にいただけで、大切な人たちに迷惑が掛かってしまうということを。それくらいなら、僕はこの街から離れよう。せめて、大切なものは、自分の手で守りたい。だから。

「絶対、この街に留まるようなことはしません、だから、蘇芳君に、

「その言葉に、嘘はないわね？」

「！」

懐かしい声に、僕はその方向を向く。朔さんの背後に、一人の女性が立っていた。蘇芳君に良く似た整った顔が、僕をじっと見つめていた。

「おば・・・・さん、」

女性「蘇芳君のお母さんは、一点の曇りもない澄んだ眼差しで、僕をだけを見ている。

「これ以上上総を、あの子を傷つけたら・・・・私はあなたを絶対に許さないわよ」

「・・・・・・・・・・はい」

僕は、お母さんの様子に怖気づきながらも、頷いた。お母さんはそう、と呟き僕を手招きする。

「いらつしゃい。上総に会わせてあげるから」

今？急な話に、僕は慌てる。

「い、今すぐですか？」

「嫌なの？」

「い、嫌というわけでは・・・・ちょっと驚いたから、」

「時間、ないんでしょう？」

「!」

この人は一体何処まで知っているんだ？僕の正体までも知っているのだろうか。僕がお母さんの素性に考えを及ぼそうとしているのを、朔さんは敏感に気付いたようだった。

「余計なことは考えるな」

ボソツと耳元で囁かれ、僕はビクツと身を震わせる。

「行きましよう、浅葱空良君」

お母さんの何処か悲しげな口調に、僕は思わず頷いていた。

第十四話：上総の母親と珠洲村朔（後書き）

上総のお母さんは一体何者なんでしょう。そして、彼女の手引きで浅葱は上総に会うことになります。その再会は、果たしてどうなるのでしょうか。

第十五話：さよならなんて言つなよ（前書き）

う、かなり久しぶりにこの作品を投稿します。方向性が分からなくなってるのですよ……。

第十五話：さよならなんて言っなよ

お袋は手を洗いに行っただまま、なかなか戻ってこなかった。まさかトイレでぶっ倒れてでもいるんじゃないだろうな。と思っていたら、

「お袋、遅かったな」

お袋の後ろに誰かの姿がある。一体誰だろう、それにお袋はどうしてあんなに強張った顔をしているのだろう。

「上総、あんたに会いたいつていう子がいるのよ」

「……誰？」

「きつとあんたも会いたいつて思っていた子よ」

俺はその言葉に、ハツとする。俺が会いたいつて思っている奴、それは

「浅葱！？」

お袋に続いて姿を見せた浅葱は、俺の大声にビクッと身を竦ませた。

「浅葱、」

「あ、あの、」

浅葱は泣きそうな顔で、入り口に立ち尽くしたままだ。なら俺から行くまでだ。お袋は黙っているの、ベッドから出て問題はあるまい。

浅葱は俺の所作を見つめるだけだ。

「浅葱」

「あ、あの、蘇芳君、」

何か言いたいがあっても言葉にならないのだろう。浅葱は何度も口を開閉させるが、言葉を出せずに泣きそうな顔になる。七ヶ月前と、全く変わっていない顔だ。

「……ごめ、なさい」

謝罪の言葉が零れ落ち、そして白い頬を透明な雫が伝う。嗚咽に消える声。

「せ、で……僕のせい、で……怪我、し、て」

「・・・今まで、何処にいたんだ？」

「・・・そ、それは、」

「七ヶ月前のあの日、浅葱は何をしたんだ？俺、覚えてるんだ・・・あの、へんな男と光と、浅葱の泣いた顔」

「ほ、本当は、もつとちゃんと別れの挨拶をしたかったんだけど、」
「違う。俺が言いたいのはそんなことじゃない。だから俺は浅葱の細腕を掴んでいた。浅葱が瞠目する。」

「す、蘇芳君？」

「確かに別れ方もいきなりで有耶無耶な感じで終わったけど、俺が言いたいのはそんなことじゃない。浅葱がどうしてあんな形で姿を消さなきゃいけなかったか。俺はそれが知りたいんだ」

真っ直ぐに浅葱を見つめると、浅葱は居心地悪そうに身動きした。

「俺の前にまた立つてるとことは、何か言いたいことがあるんだろ？七ヶ月前のあの晩みたく」

「そ、それは」

浅葱の体は小刻みに震えている。寒いのか、それとも緊張しているのか。

緊張する理由は、何だ？

「俺には言えないことか？」

「す、蘇芳君・・・腕、痛いよ、」

「あ、わ、悪い、」

俺は知らず知らずの内に浅葱の腕を掴む手に力を入れすぎていたようだ。慌てて浅葱の腕を解放する。

「ごめんなさい、」

「浅葱、」

「でも、もう大丈夫だから」

「え？」

「絶対蘇芳君が怪我しないように、するから」

儚い笑みを浮かべる小さな顔。元々細かった体は更に痩せたように見える。疲れの浮いた黒目がちの瞳が哀しげにそっと伏せられる。

「……………最後に、蘇芳君と話せて良かった」

「最後？」

その言葉に俺は激しく眉を寄せた。気配だけを感じ取ったのか、浅葱が身を硬くするが、前言を撤回する素振りは見せない。

「……………さよなら」

「は？」

「僕は今からこの街を離れるから……………もう絶対に足を踏み入れないから」

伏せていた目を、俺に向ける。

気弱な瞳の印象が強い浅葱だが、今の浅葱の眼光にはゆるぎない力が籠もっていた。

俺ですら息を吞んでしまうくらいの。

「もう会えなくなるけど、最後にちゃんと話せたからもう大丈夫」
何が大丈夫なんだ。

「これが、本当の、“さよなら”、だよ」

何ひとりで納得したような顔してるんだよ。俺にも分かり易く話せよ。

「意味が分かんねえよ、浅葱！ちゃんと説明しやがれっ」

「ダメだ、無理なんだ……………蘇芳君には何も話せないんだ、」

「何で！俺じゃ力になれないってことなのか！？」

浅葱が哀しげな目をして、首を何度も左右に振る。

「……………違う、僕はただ蘇芳君を巻き込みたくないだけなんだ。僕のせいで蘇芳君が傷付くのがいやなんだ」

浅葱がもどかしそうな口調で言う。それに比例して、俺ももどかしい気持ちになって来た。

伝わらない気持ち。どうしてこちらの心配が伝わらないのだろう。

「良いか浅葱。俺はお前に傷つけられることはないよ」

「……………えっ？」

俺は少しでも浅葱が安心出来るように、歯を出して笑って見せる。

浅葱の大きな目が歪み、

「お、おいっ」

いきなりしゃがみ込んでしまう。俺は慌てて浅葱の肩を掴む。

「どうして？」

「え？」

「僕のせいでそんな怪我したのに、どうして……どうして僕なんかに笑いかけてくれるの？ どうして？」

浅葱の慟哭が胸に響いて凝り固まる。

俺は我知らず浅葱を自分の腕で抱き締めていた。

「すっ、蘇芳くんっ？」

「泣くな」

「……っ、」

「もう泣くな。泣きすぎで干からびるぞ」

こんなときに気のきいた台詞が言えない自分が情けない。

「すお……っ、」

「だって親友だろ？ 俺たち」

腕の中、浅葱の痩せ細った体がビクツと震える。

「しん、ゆう」

「大事な親友が泣いてるんだ。慰めて何が悪い。安心させようとして何が悪いっつうんだ」

俺の言葉が届いたのか、浅葱は声を上げて泣き始めた。

「うわあ、うわああああっ」

この細い背中に何を背負っているのかを考えるだけで感じたことのない胸の痛みに襲われる。

「俺なら大丈夫だから、な？」

浅葱が必死に首を縦に振る。

「だから、さよならなんて言っなよ。言わないでくれ」

性格はかなり違うのに、最初は全く感情の見せない浅葱に不気味さすら感じていたのに。

今では、こんなにも大切に思っている。

そしてそれは浅葱にも伝わったと俺は思っていた。

でも、当事者の俺と浅葱を置いて事態は急速に動いていた。

第十五話：さよならなんて言っなよ（後書き）

2009年9月12日、完結設定にしました（汗）

どうにもこの作品に関してスランプに陥ってしまい、続きがいつになるか分からないためです……。

2ヶ月放置すると、すぐ赤字で放置アピールされるんで、なんかなあ…と思い、完結設定に。

また話の筋がまとまりましたら連載再開いたします。半端、すみません…（汗）

国府神紫音

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4556f/>

さよなら

2010年10月12日06時58分発行